

Tangolandia

春
2016

日本タンゴ・アカデミー会報

(HP : <http://tangoacademy.jp/>)



—目次—

“第三期タンゴ黄金時代”と日本タンゴ・アカデミーの新たな方向について	飯塚久夫	2
わたしのひそかに愛するタンゴ Vieja Recova	高場将美	5
私の愛聴盤(第8回)	春日井邦夫	9
タンゴこぼれ話(第5回) アルゼンチンタンゴ・ダンスへの思い	弓田綾子	14
カンパラーチェ逍遥(第4回)	島崎長次郎	16
アニバル・トロイロへの一考	高田幹雄	19
タンゴへの想い	水野 中	22
歌にかけた青春の日々	川名久仁子	25
タンゴストーリー「パンパの風の中で・・・」	寺本千栄子	27
池田みさ子とロス・アミーゴスを聴きに行った	鈴木茂次	31
「タンゴ心酔クラブ」100回記念に参加して	大澤 寛	34
オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ第54回リサイタル	笠井正史	36
セステート・メリディオナル	齋藤富士郎	38
東京・春・音楽祭—東京のオペラの森 2016	笠井正史	41
会員アンケート「私の好きな Chiqué 3曲選」第5回(最終回)発表		42
ライブに行こう!	笠井正史	46
会員の広場		48
新・訳詞コーナー「Cualquier cosa」	大澤 寛	51

“第三期タンゴ黄金時代”と 日本タンゴ・アカデミーの 新たな方向について

会長 飯塚久夫

今年度は当アカデミー（以下NTA）の役員改選期にあたり、前号（タンゲアンド・エン・ハボン）に記載の通り改めて20名の役員（理事12名、監事1名、実行委員7名）を選任しました。これらの役員で皆様とともにNTAの益々の活性化を図っていきたく存じます。しかしながら、現実問題としてNTAも日本の社会問題そのものに直面しました。今年度にあたり17名の退会者となりましたが、その理由の多くは“高齢化”ということがあります。



一方、世界はダンスを軸にタンゴ・ブームとなっています。欧米の人口10万程度のどの街にいてもダンスの場（ミロンガ）が開かれています。韓国、台湾を筆頭にアジアでも然りです。

タンゴには比較的縁遠い北米でさえ、エンディングをこんな素晴らしい台詞で結ぶ映画まで作られています～「It's never never too old to learn (tango)」(タンゴには年をとり過ぎたなんてことは決してないのだ!) <ロバート・デュバル主演・監督『愛と暗殺のタンゴ』2002>～そうです！言うまでもなく、音楽も踊りも、年をとればとる程むしろその“味”や“深み”を感じる事が出来るのがタンゴです。

20世紀初頭以来、ヨーロッパへ渡ったタンゴがアルゼンチンとは異なる社交ダンス（“ボールルーム・ダンス”）として続いて来ましたが、昨今のようにアルゼンチン・スタイルの踊りが世界を席卷したのは、タンゴ史上かつてないことです。もっぱらダンスをやっている人に、音楽そのものを聴き込まないとタンゴ・ダンスは上手くならないという認識も急速に広まっています。ミロンガでの演奏の機会が増えたこともあって、若い演奏者が台頭しだしているのも世界共通の現象です。音楽も踊りもまさしく今、世界は“第三期タンゴ黄金時代”を迎えているのだ！と、私は提唱します。

そうした中で、NTAも新たな方向を打ち出して行きたいと思います。ポイントは3点です。

1. 開かれた日本タンゴ・アカデミー
2. ホーム・ページ等ネット対応の充実

3. 全国団体として地方交流のあり方の見直し

まず、NTAは従来、リンコン・デ・タンゴの参加のみは非会員も誘ってきましたが、機関誌（タンゲアンド・エン・ハボン、タンゴランディア）の執筆やイベント（セミナー、リンコン、ミロンガ等）の解説・出演は原則、会員に限定してきました。それでは会員の高齢化に伴って縮小路線を辿ることになりかねません。特に機関誌の執筆をお願いできる人が少なくなる中で、編集委員は原稿の確保に苦勞しています。また、タンゲアンドの研究誌的な役割は今後とも重要ですが、その趣旨で書いて頂ける方も少なくなりつつあります。まず執筆や出演・参加をタンゴ界全般に広げて、結果として会員も増えるという方向を考えていきます。

またそのために、今年度から「企画委員会」を発足させました。そこでは従来の枠に捉われない新たなアイデアも論議していきます。

次に、NTAの会員でインターネットを使っている人は半数ほどしかいないということは承知しています。しかし、今やネットを利用したホームページ（HP）やフェースブック（FB）などがコミュニケーションの道具として最も簡便で頻度の高いものとなっており、特に若者にはそれ以外にはあり得ないほどの状況です。

NTAも“団塊の世代”を中心に定年退職期を迎えて改めてタンゴを聴いてみようという人にアピールすることをまだまだやる必要があると思いますが、若い会員を増やすことも重要でしょう。そのためにも、まずHPを筆頭にNTAのプレゼンスを高めることをしなければなりません。非会員にNTAを知ってもらうには今やHPが必須です。会員にとっても、頻繁で最新の有用な情報を得るためにも役立つでしょう。

NTAは既にHP（<http://tangoacademy.jp/>）を有していますが内容の更新を頻繁に行ない難しいし、投稿なども簡単に出来るものになっていません。従って、HPの全面リニューアルを行ないます。そのためには費用もかかるのですが、予算の苦しい（年間収支差額は約10万円）NTAとしては、まず役員のボランティア的な寄付でもってこれを賄っていきます。

内容も（従来方針を変えて）、機関誌のバックナンバーで今日でも役立つ記事や会員が書き溜めた貴重なタンゴ情報も掲載していきます。

三番目に、全国団体としてのNTAにとって会員の絆は機関誌が“命”、それはこれからも普遍的なものがあるでしょう。一方、東京と地方という観点から、関西、中部、東北リンコンなどを行なってきましたが、今後は「東京あつての地方」でなく「地方あつての東京」という観点からの交流に変えていきたいと思ひます。即ち、いろんな企画を実行する際に、まず地方の主体性を尊重します。あるいは「地方と地方」との交流も促進することでも大事でしょう。東京は地方の要請に応じて、東京ならではのコンテンツや情報で地方をお手伝いする、また、地方のイベントに際し、NTAは主催でなく原則として後援か共催ということにしていきたいと思ひます。

機関誌が“命”と言いましたが、NTA予算の半分近くを機関誌の製作費が占めているという問題もあります。コスト・ダウンの検討をしましたが、現状ではいかんともし難い状況です。今後の工夫を引き続き行なって参ります。

最近の問題（悩み）の現実はもう一つ、高齢化に伴って、手放しても良くなったレコードやCD、資料などの処分をNTAがお手伝いする要請が増えているということです。これについては、NTAが広い場所を有していることもないので、機関誌や（近々更改される）HPに“会員の広場”欄を設けます。それを通して、会員どうして活発で有効な活用策を実施して頂きたいと考えます。

以上、時代の流れと変化に応じたNTAの新たな方策の一端をご披露しましたが、これ以外にもいろいろなアイデアがあろうかと存じます。会員の皆様方の忌憚ないご意見もお寄せ下さい。

最後に重要なことを申し上げます。今回の3点はいずれも会員が払う会費の使い方を従来と少し変えるということの意味しています。つまり、会費は会員だけのために使われて然るべきというのが筋ですが、それだけではこのNTAはジリ貧になります。ネットを使わない会員に役立つわけではないHPの再構築はまず寄付で賄いますが、その維持や他の施策は、会費が直截的に会員のためだけに使われるのではなく、会員でない人にもメリットがあることになるかも知れません。しかし、それはあくまでNTAの継続性・発展性を考えてのこととお考え頂けたらと存じます。

ひいては私たちがこよなく愛するアルゼンチン・タンゴのために皆様の“寛大さ”“寛容さ”をお願いするものであります。

従って本稿の結びのキーワードはこれです～<タンゴよ永遠に！>

熊本大地震お見舞

大きな余震が今も続く熊本大地震のお見舞を申し上げます。

震源近くにお住まいの会員の方々そして近県在住の会員の皆様に心からお見舞を申し上げます。

会長 飯塚久夫

九州在住の会員の皆様

河野洋一（福岡県）

柴田 繁（福岡県）

野口義征（熊本県）

野村敏彰（宮崎県）

藤本省介（福岡県）

森本良二（長崎県）

（敬称略 アイウエオ順）

わたしのひそかに愛するタンゴ

ビエハ・レコーバ (古いアーケード通り)

Vieja Recova

高場 将美

この曲の題名は、ほとんど固有名詞に近い。ブエノスアイレスの特定の場所の名前と聞いていい (あとで説明します) のだけけれど、日本では『哀れな老婆』という題名が付けられていた。この定訳を付けた人は、東芝音楽工業株式会社で、タンゴのレコード発売を、全面的にただひとりで担当していた、故・中島栄司 (なかじま・えいじ) さんのはずだ。中島さんは長くアルゼンチンでくらしてきた人で (音楽関係の仕事ではなかったが)、スペイン語はもちろん、ブエノスアイレスのことにも通じていたけれど、ここでは歌詞の全体の意味から考えて、わかりやすい日本語の題にしたのだろう。

『哀れな老婆』は、日本で発売されたのはホルヘ・ビダール Jorge Vidal の歌ったものが最初だと思うけれど、レコードを持っていなかったわたしは覚えていない。でも、ずっとむかしから、この曲をガルデル Carlos Gardel が歌ったのをどこかで聴いたことがあり、メロディや、歌詞の (単語ひとつずつではなくて) 全体の調子に強い印象を受けて大好きになっていた。サワリの最初が「ビエハ・レコーバ……」で、それが題名なのも知っていた。その正しい意味は、長いあいだ解明できなかった。分かったのは、ごく最近である。

長い年月がたって、日本でガルデルのCD 2枚組が出て、この曲が入っていた。自分で好きなときに、いくらでも聴ける。感動して、聴くたびに泣いていた。いまでも、いつも「ビエハ・レコーバ」の部分に入る少し前から、つぶった両目に涙がにじんで熱くなる。

作詞者はカディーカモ Enrique Cadícamo、作曲者はシアマレーラ Rodolfo Sciammarella である。1930年発表とのこと。歌詞が先に書かれ、それに合わせて作曲されたのだと思う (少なくとも第1部は)。

第1部は、1フレーズが16音節 (8 + 8) という長い詩形で物語られていく。この詩のことばのリズムもびびきも、すばらしく魅力的で、カディーカモの大傑作のひとつだ。

そこに付けたメロディは調子よく、ほんとにうまくできている。だれでもすぐ覚える印象的なメロディを作る (しかも、どの曲とも似ていない) ことではこの時代の第一人者だったシアマレーラならではの、最高の職人芸といえる。歌詞もメロディも、即興的に短時間 (数分間でしょう) でつくられていて、これぞ大衆芸術の真髄だ。

最初の部分の楽譜をごらんください。

(なお、これは出版楽譜ではなくて、ガルデルが歌ったのを楽譜にしてみました。シアマレーラはピアニストだったので、ここに載せた部分の後半では、もう少し音が動くが、ガルデルは、歌詞のじゃまにならないように、すっきりさせて、ストレートに表現する。

音程でいじくらないで、声の表情で変化のある語り口が生まれる。すばらしいですね！
いつ聴いても、また新しい録音のように思える)。



La otra noche mientras iba caminando como un curda, / tranco a tranco, solo y triste, recorriendo el veredón, / sentí el filo de una pena que en el lado de la zurda se empeñaba, traicionera, por tajearme el corazón.

Entre harapos lamentables, una pobre limosnera, / sollozando sus desgracias a mi lado se acercó / y al tirarle unas monedas a la vieja pordiosera, / vi que el rostro avergonzado con las manos se tapó.

(このあいだの夜、わたしは酔っ払いのように歩きながら、一步一步 足を運び、ひとりぼっちで悲しく、歩道伝いに 街をめぐるに——そんなとき、わたしは悩みの刃(やいば)がせまってくるのを感じた。悩みはわたしの胸の中の左のほうで、わたしを裏切つて、わたしの心臓に本気で切りつけようとしていた。見るも哀れなボロ服を着て、ひとりのかわいそうな女が ほどこしを求めて、みずからの不幸の数々を嘆きながら、わたしのそばに近づいてきた。そしてわたしが数枚のコインを彼女に投げてやったとき、わたしは見た、恥ずかしさでいっぱい顔を、彼女が両手で覆うのを)。

なぜ彼女が顔を隠したのか、それは第2部で、分かってくる。

その第2部は「ビエハ・レコーバ……」と始まる。これはどういう意味？ わたしはずっと実体が分からず、それでも感動していたのだが……。

古いレコーバ——その「レコーバ」の意味がわからなかった。

ようやく2、3年前にわかった。

レコーバとは、古いスペイン語で鶏肉や卵の店・市場、ラテンアメリカでは食品市場、アーケード付きの市場、屋根のある通り道を指していた(18～19世紀)。

ブエノスアイレスでは、最初の食品(最初は牛肉だけ)市場が Recova Vieja(レコーバ・ビエーハ=昔の市場)と後に呼ばれた(新しい市場ができたので)。この市場はアーケード付きの1本の通りで、現在の国会議事堂の真ん前、五月広場の真ん中であつた。19世紀の話で、タンゴの世界とはまったく接点のない場所である。

(余談になるが、さっき名前が出た中島榮司さんが、レコード愛好家のための小冊子にブエノスアイレス案内の記事が書かれていて、この古いレコーバの名前も出てきた。でも、何の説明もなく、この曲とどうつながるのかわからず、わたしは狐につままれたような思いで、「レコーバ」という文字を見つめていたのを覚えている)。

とにかく結論を言うと、レコーバとは、アーケード付きの商店街を指すことばである。20世紀になって、《バホ》地域で、昔から商店街だった、屋根・庇(ひさし)付きの道が

いくつかあり、それが「レコーバ」と呼ばれた。庇の支柱が、歩道の縁に沿って並んでいる……そんな時代遅れの、街路である。

《パホ》地域（行政上の公式名称ではない）とは、ブエノスアイレス市の東端の、ラ



プラタ河に沿った地帯を指し、河に近いから「低いところ」と呼ばれた（実際に都心よりも海拔が低い）。Paseo Colón（パセーオ・コローン）と、その延長である Leandro N. Alem（レアンドロ・アレーン）の両大通り

に沿った、細長い、かなり大きな地域で、その東側は埠頭など港の設備がある。

1950年代からの不景気によるキャバレーやナイトクラブの閉店、その後の都市再開発で、大変貌してしまっただが、かつては、高級でないキャバレー（もちろんタンゴ楽団が出演）、バーレスクやストリップ・ショーの劇場、流しの歌手・音楽家や娼婦が出入りする小さなカフェやバー、船員や行商人などのための安旅館や下宿、怪しいホテルなどがある、夜は危険な魅力がいっぱいの、活気のある地域だった。

わたしは1970年代の初めのこの地域のごく一角を知っているが、アブナイところは残っていた。この曲のできた時代には、「あのレコーバ」とみんなが知っている道が1本あったらしい。それをカディーカモは「古いレコーバ」と呼んだのだろう。レコーバ（アーケード通り）そのものは、夜は店も閉まっていて、アブナイことはない、まわりは夜の歓楽街でも……。

レコーバは、ブエノスアイレス各所にあったが、取り壊されたり、老朽化したりで、形だけでも残ったのはパホ地域だけだったようだ。レコーバということば自体も死語のようになってしまったらしい。今日の人にはもう知らないらしい。昔も一般的でなくなっていたことは、上に掲げた初版楽譜の表紙でも、つづりが間違っていることから分かる。

さて、第2部（サビの部分）は、歌詞はゆったりと、メロディもそれに応じて変わる。

Vieja Recova, / rincónada de su vida, / la encontré vieja y perdida / como una muestra fatal.

La mala suerte / le jugó una carta brava, / se dio vuelta la taba, / ¡Vieja Recova, / si vieras cuánto dolor!

（古いレコーバ、おまえは彼女の人生の最後の片隅。わたしは年老いて見捨てられた彼女を見つけた、宿命の見本として。悪運が、彼女におそろしいカードを突きつけた、運命の表と裏が逆転した。古きレコーバ、おまえにわかるだろうか、どれほどの痛みか！）

最後の部分の楽譜を掲げておこう。盛り上げないで、沈んでいくメロディだ。悲しくなければタンゴ名曲とはいえません。



傑作なので、第1部の繰り返しの歌詞も掲載したい。

Yo la he visto cuando mozo ir tejiendo fantasías / con sus sueños de alto vuelo y sus
noches de champán. / ¡Pobrecita! quién pensara los finales de sus días / y en la trágica
limosna vergonzante que hoy le dan!

Me alejé, Vieja Recova, de su lado, ¡te imaginas, / de la amiga de otros tiempos, qué
dolor llegué a sentir! / Lo que ayer fuera grandeza hoy mostraba sólo ruinas, / y unas
lágrimas porfiadas no las pude desmentir.

(わたしは若いころ彼女を見たことがある。彼女は空想の布を織り上げていた、高く飛んでいく夢と、夜ごとのシャンパン。かわいそうに！ だれが彼女の最後の日々を思い浮かべることができただろう、きょう人が彼女に与える恥ずかしい施しものものを。

古いレコーバ、わたしは彼女のそばを離れた。おまえにも想像できるだろう、かつての女友だちに、わたしがどれほどの痛みを感じたか！ きょううすばらしく大きかったものに、きょうはただ荒れ果てて見捨てられたところしか見えない。止めようとしてもあふれてくる涙を、わたしは偽ることができなかった)。

歌のタンゴにはよくあるメロドラマと言ってしまえばそうなのだけれど、歌詞とメロディのみごとは、ほかのたくさんの同種の曲をはるかに超えた深さの表現に達している。

カディーカモが、実在の場所「古いレコーバ」で、夜中にこの歌詞のインスピレーションを受けたことは確実だ。実際に彼が、むかし知っていた女性が物乞いをしているのに出会ったのか、まったくのフィクションなのか、わたしには分からない。そして、それはどうでもいいことだ。

この曲は作り物かもしれないけれど、完璧に真実をもった物語として生きている。

カルロス・ガルデールの歌がこの曲に真実を与えたからだ。彼はこの曲になりきって、最初から最後まで涙で濡れて歌っている。聴けば聴くほど感動が強く深くなる。ほかの歌手にはこの曲は歌わせない！

まあ作者たちもガルデールに歌わせるためにこの曲を作ったのだろう。作詞家も作曲家も全力を注ぎ、ガルデールの歌の伴奏ギタリストたちも、前奏から最高の表現力を発揮している。すべてが凝縮されて……。

それはそれとして、よくできた曲なので、ほかの歌手が歌っても魅力的だ。曲が有名な割りに、とりあげるアーティストが少ないようだが、それはレコード上のことで、実際のステージではもっと歌われていると思う。有名歌手はガルデールのすごさを知っているから、比較されないようにと、この曲は敬遠するだろうけれど、酒場などで、ギター伴奏で歌うにはもってこいのタンゴだ。

いま比較的たやすく聴けるのは、プグリエーセ Osvaldo Pugliese 楽団で、ホルヘ・ビダールが歌ったものだろう。伴奏の編曲・演奏もよく、最近はダンスのデモンストレーションにまで使われているようだ。ビダールは、わたしは好きです。

でも、とにかく、まずガルデールで聴いてくださいね。

*ガルデールが歌うこの曲を YouTube で聴きたい方には、いくつかありますが、次のものが、音がしっかりしていて最良です。——<https://youtu.be/v7gKCVWcPNU>



私の愛聴盤

～第8回～

春日井 邦夫 (岐阜市)

はじめに——

仕事と親の介護にかまけ、新譜を追いかけることも愛聴盤に聴き入ることもままならなかったこの数年、タンゴを聴くのはパソコン作業時に流すBGM（インターネット・ラジオ）程度でしかなかった。かつてはレコード棚の前に座ると目をつむっても瞬時に目指すレコードに手が届いたのに、今ではどこに収めたかわからない始末。周りにはいつも音楽があり、いついかなる時でも様々なジャンルの愛聴盤によって私は支えられてきたものだが…



入手したレコードが愛聴盤になる、ならない——その方がはるかに多いが——にかかわらず、レコードから当時の嗜好、心の有り様、生活スタイルまで手に取るようにフラッシュバックするのは、音楽が、今の言葉でいうところのコンテンツのみならず、音盤からジャケット、ライナーノーツまで含めたパッケージとして存在していたからに違いない。私の期待を裏切ったレコードが少なからずあったとしても、そのいずれもがそのときどきに私の目にとまり、一度は私の心を揺り動かしたものばかり。その意味では、すべての収蔵レコードは私にとって「愛聴盤」ならずとも「愛着盤」なのである。

あらためて音楽との関わりを振り返ることとなった編集部からの依頼に感謝しつつ、思いつくまま幾枚かの愛聴盤を引っ張り出してみようと思う。

1. 初めて買ったタンゴのレコード

Victor SHP-5334

Juan D'Arienzo / El Rey Del Estéreo

「これぞステレオ・タンゴ!～ダリエンソ特報」(1963年録音)

ラジオのタンゴ番組をテープに録音しては繰り返し聴いていた時期を経て、そろそろ自分でもタンゴのレコードを持ちたくなった頃、新聞のレコード評の「ダリエンソの最新ステレオ録音」という記事が目に入った。「僕でも知っているあのダリエンソが、有名古典曲ばかりをステレオ録音?!」最初に所有す



べきタンゴ・レコードはこれしかない、とばかり胸を躍らせてレコード店に赴いた。翌日音楽好きのクラスメートに「君、ダリエンスの新しい録音聴いたことあるかい？」などと、いっばしのタンゴ通を気取ったことも、今となっては気恥ずかしくも懐かしい思い出である。少なくとも数か月間はターン・テーブルを一人占めしたダリエンスが、毎日部屋に鳴り響いた。

北米市場向けにFor Export（輸出用）と企画されたRCA 3枚目のステレオ録音が、トロイロ、チャルチャレーロスに続く当ダリエンス盤であった。しかしどんなに繰り返し聴いても、「リズムがかなりトランキーロ」であるとか、A MEDIA LUZ やA LA GRAN MUÑECAが「ダリエンス・スタイルとはかなり離れた型」で「賛否両論に分かれる」という高山先生の解説は、タンゴ新参者の私にとって直ぐには理解の及ぶところではなかった。しかし“電撃のリズム”が嫌というほど身体に染み込んだ私は、やがて上京し籍を置いた慶応タンゴで『フェリシア』『フェエス』『インデペンデンシア』などダリエンス・スタイルにどっぷり浸かることになる。

2. 初めて鳥肌が立ったタンゴのレコード

Philips SFX-7009

Oswaldo Pugliese / A Mis Amigos

「夜明け／プグリエセの神髄」（1962-64年録音）

ここでの「鳥肌が立つ」は、もちろん言葉本来の意味「寒気や恐怖」ではなく、「感動による交感神経の緊張、高ぶり」とお取りいただきたい。レコードの溝に針を落とすや否や鳥肌が立つ演奏は、私の場合ピアソラやプグリエーセ盤のほか、そうざらにあるものではない。

タンゴが少し分かりかけてくると、今度は本場の演奏家を生で聴いてみたくなった。そんな頃に初来日したのがプグリエーセ楽団である。もちろんそれまでもプグリエーセは放送で聴いてはいたが、決して聴きやすい音楽ではなかった。むしろ難解であった。タンゴ入門者にとってプグリエーセの音楽は、ドイツ語学習において最初に乗り越えねばならない「格変化」にも似て、行く手を阻むかのように立ちはだかった。すごすご引き下がるか、敢然と立ち向かうか。ひたすら原曲のカタチをつかみ、他楽団と聴き比べることによって、特徴的なスタイルを少しずつ理解していった。やがてスツと霧は晴れ、前方の視界が開けてきた。タンゴがいよいよ面白くなってきたのもこのあたりである。

1965年プグリエーセ楽団来日に先立って発表されたのが、日本ビクターから出た当フィリップス録音。何ととっても意表を突いたのは、一捻りも二捻りものアレンジがほどこされた新しいレペルトリオEL AMANECER、INSPIRACIÓN、CHARAMUSCA、LA PAYANCAなどの古典曲。鳥が鳴く、鳴かないはともかく、アルバム・タイトル曲エミリオ・バルカルセ編曲の夜明けの描写は今までにない解釈で、白々と夜が明ける静かな導入部か



ら次第に全合奏による強烈なスタッカートが展開する様は、何度聴いても背筋がゾクゾクしたものである。緩急自在なテンポ、精緻にして豪放、他の追随を許さない完璧なアンサンブル。初めて聴いた生のステージ、とりわけ圧倒的なバンドネオン陣の迫力は、強烈な印象を私に残していった。

一方、翌66年からスタートしたRCA《黄金時代》シリーズによって、私の関心は一気にタンゴの歴史的録音へと向かい、タンゴ史を縦・横断する新たな楽しみを知ることになる。

3. 初めて手に入れた中古レコードの戦利品

Philips FL-5002

Carlos Di Sarli / Nubes De Humo

「ディ・サルリ／不滅のマエストロ」(1958年録音)

東京での学生生活唯一の贅沢は、月に一、二度、新宿歌舞伎町《コンサートホール》にティピカ東京や嵐子さんを聴きに行くことであった。南口甲州街道・歩15分のアパートへの帰り道は、青梅街道ガードをくぐり西口小田急ハルク裏の中古レコード「オザワ」に寄るのがお決まりのコース。とは言えこちらは慎ましやかな生活を余儀なくされた地方出身学生、中古レコー



ド漁りというには程遠く、ただただレコード・ジャケットの顔ぶれを見ながら、あれもある、これもあると楽しんでいたに過ぎない。そんな或る日、偶然目に留まったのが前から探していたフィリップス時代のディ・サルリ「ラスト・レコーディング」。ちょうどクラブで練習中のBAHÍA BLANCAやHASTA SIEMPRE AMORも入っているし、今買わないでいつ買うのだと自問するも、2000円もの立派な値札が付いた代物はおいそれと即断できるものではなかった。タンゴ・マニアの目に触れぬよう他ジャンルのコーナーにそっと忍び込ませ、その日は帰宅。バイト代が入った一週間ほどのちに再訪し念願の当LPを手に入れた。今でもこれを見ると、60年代後半新宿の雑踏と喧騒が昨日のごとく甦ってくる。

さて、ディ・サルリといえはRCA（一期～三期）、ミュージック・ホール期そのいずれもが捨てがたい魅力があるものの、個人的にはその円熟味と音質からもっぱら50年代後半のRCA三期を聴くことが多い。しかし人気絶頂期の楽団分裂を経て再編成された最後のフィリップス録音は、病の進行するディ・サルリの気迫に満ちた執念を感じさせて、まことに貴重である。R. ギサード、E. バルダーロ、S. バジュールら8人の弦セクションによる情緒溢れんばかりのレガート。F. ベルディ、J. プラサ、J. リベルテラらバンドネオン陣5人による鋭く研ぎ澄まされたスタッカート。総勢15名の一条乱れぬアンサンブルには、すべての虚飾を排した比類のないタンゴ美がある。重厚で格調高いUNA FIJA やCHAMPAGNE TANGOなどの古典タンゴと、半数を占める甘い歌謡タンゴの作品群。大衆に愛された永遠のマエストロ、ディ・サルリと50年代後半という時代を一層身近に感じ

るレコードとなった。

4. 新譜から目が離せなくなった一枚

GOMIA GP-103

Liliana Barrios / Troileana (2005年 録音)

南米旅行した友人がブエノスアイレス滞在中に“観光”で《カフェ・トルトーニ》を訪れ、そこでたまたま聴いた歌手のCDをお土産としていただいたもの。この種のお土産が期待値を上回ることはめったにないものだが、久しくタンゴの新譜から遠ざかっていた私に、新譜から目を離すな、という戒めにもなったCDである。デビュー間もない1998年にネオタンゴと来日して



いたという彼女、不覚にもノーチェック、ノーマークであった。今、一番ステージで聴いてみたい女性歌手、それがリリアーナ・バリオスである。

本CDは彼女のガデル、エスポントに続く三作目の作品集で、作曲家トロイロへのトリビュート・アルバムとしては出色のものと言えよう。彼女の歌の魅力は、感情過多でも醒めた表現でもない絶妙なバランスにある。しっとりした知的で繊細、抑制のきいた感情表現は、バンドネオンの語り口そのものがタンゴになったトロイロ作品ではとりわけ顕著に、聴く者の心に直接語りかけてくる。伴奏はかつてスサーナ・リナルディ日本公演にも同行したファン・カルロス・クアシ（編曲・指揮）率いるセステート。彼女の歌に寄り添うバック演奏陣（Bn：ワルテル・リオスら）も秀逸である。トロイロ作品をこよなく愛する私には、LA ÚLTIMA CURDA、CHÉ, BANDONEÓN, SUR, BARRIO DE TANGOなど主要作品を網羅する当アルバムすべてが貴重だが、なかでもリリアーナ自身が「甲乙つけがたく、どちらもベストの出来」として楽団伴奏とバンドネオン伴奏の二つのバージョンを収録した『最後の酔い』は、一番の聴きものである。

5. タンゴ遍歴「私」の一枚

Viento Sur TR-3002

Trío Porteño con Nostalgia

「トリオ・ポルテーニョ、郷愁をこめて」(2013年 録音)

Viento Surとは、私が酔狂で立ち上げた——と言っても単にネーミングだけの——超インディペンデントなレーベルであることを、先ずはお断りしておきたい。『古典タンゴからピアソラまで』(2002年)、『ブエノスアイレスの香り』(2007年)に続く三枚目のアルバムが、2014年3月にリリースした当CDである。厚顔を承知で愛聴盤でも何でもないものをこの場で取り上げるのは、私のような一愛好家にとってCD制作は、いわば長く曲がりくねったタン

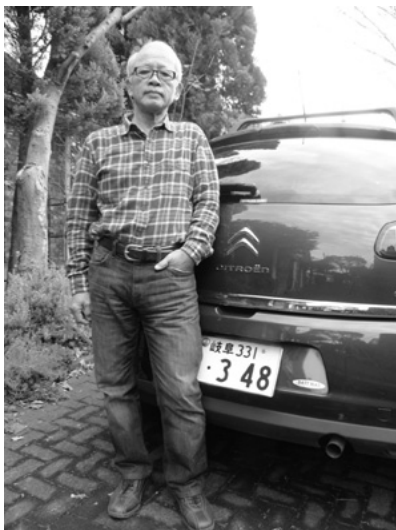


ゴ遍歴の末によく書き入れた「竜の瞳」のようなものだからである。メンバーは1982年創立以来の春日井邦夫 (Bn)、岩切陽子 (Vn)、平林秀基 (Cb) のトリオに藤田治樹 (Vo) が加わる。過ぎ去った遠い日々や恋愛感情への追憶。失われていく下町の情景や古き良き時代への懐古。私たちにはさらに遠くなっていく昭和という時代へのノスタルジー。それらすべてへの想いがあふれて、私に懐かしいタンゴを呼び起こした。個人的には十代半ばによく聴いたARRABAL、INSPIRACIÓN やVIVIANI、歌ものではMALENAやNOSTALGIAS、三十数年前にガルシーア氏からいただいた楽譜によるAL MAESTRO CON NOSTALGIAなどを収録できたことが、ことのほか嬉しい。

6. 「無人島に持って行くなら」の一枚

タブレット端末

カヤック・ツーリングが趣味の私にとって「無人島云々」は、バッテリーとネット環境の問題さえクリアできれば決して架空や仮定の話ではなく、極めて現実的な想定を意味する。かつて漕破した慶良間諸島、中国漓江90km、バハカリフォルニア一週間ツーリングなど満天の星空テント生活に「これ」があれば、どれほど癒され慰められたことか。



車も「トレス・クアトロ…」

OneDrive とGoogle Driveに無料で設定される各15GB のクラウド・ストレージを使用するだけでも、数百枚のCDを軽くひと飲みし、世界中のインターネット・ラジオ（私のお気に入りはLa 2x4 やRadio General Belgranoなど）を聴けるのだから、全く良い時代になったものである。これにTodotangoのアプリをダウンロードすれば、画面アイコンをタップするだけで手のひらはたちどころにタンゴ・ワールドと化す。日替わり月替わりで多種多様な音源が原盤データとともに提供されるのであるから、一体これ以上何を求める必要があろう。今や私にとって8インチのタブレット端末は、究極最強最愛の愛聴盤（板？）となった。

—了—

アルゼンチンタンゴ・ダンスへの思い

Sacarle viruta al piso…削りくずをとる*

フアン・カルロス・コペス (Juan Carlos Copes)
(GENTE誌) 訳: 弓田 綾子



私は1931年ブエノス・アイレスに生まれた。16歳の頃、ブエノス・アイレスの西端に位置するマタデーロ市で暮らしていた。マタデーロはスペイン語で“屠殺場”のことを意味する。ブエノスには二つの大屠殺場があり、その一つがマタデーロにあった。また、ここは首都とパンパを結ぶ地点でもあった。ここに運ばれた牛の肉はブエノスの首都圏の重要な食用肉となった。そのためか今日でもハムやソーセージを売る店が多い。特に革製品が日曜日の“蚤の市”で人気となっている。

当時、マタデーロでは毎日タンゴの曲が街中に流れていた。そう、どこへ行ってもバンドネオンの音ばかりで、特にバンドネオンが夜の帳（とぼり）に語りかけるように、その哀愁の音色がいつも私の心に響いていた。そして、いつしかタンゴは私の心をとらえてしまい、勉学を忘れたかのように、激しいリズムを刻むタンゴの流れる街外れのダンス・クラブに友人たちと通うようになった。

しかし、当初このダンス・クラブにはなかなか入れなかった。なぜならここは単なるレジャーでダンスを踊る場所ではなく、一流のダンサーになるための人たちが厳しいレッスンに耐え、励んでいたクラブだったからだ。それらの光景は、私にとって今まで経験したことのない、まさに目を見張るばかりの世界だった。私は踊らずに、ただじっと踊っている人たちを何時間も見続けていた。皆がプロのような、素晴らしい踊りをしていた。

そしてタンゴの踊り方を次第に覚え始め、タンゴ・ダンスに魅せられた私はどうしても本格的にダンスを学びたく、足繁く通いやっと許可された。

最初は来る日も来る日も男の人と踊らされた。そうすることによって男性がどのように女性をエスコートするかを覚えるのだ。それらを完全にマスターすると、次に初めて女性と組み本格的にレッスンが始まり、私はプロを目指した。

タンゴの踊りには、動き方、パートナーのエスコート、視線の位置、表情などが大切だが、それらの踊り方を教える本はない。だからこそ踊るそれぞれのカップルに個性があるのだ。

タンゴ・ダンスの初期の頃は、ボカの周辺に集まる低辺層の人たちに、カンジェンゲスタイル（テンポの速い下町風の踊り方）で踊られていた。こうして常に売春宿の踊り、と上流社会から蔑視されていたタンゴも、20世紀の初めヨーロッパで大流行し始めたが、当初タンゴ・ダンスは下品でみだらと毛嫌いされ、ローマ法皇から禁止令が出されたりした。

そんな中、アルゼンチンから名手のカシミーロ・アインがヨーロッパに渡り、その見事な踊りを法王に披露し、その誤解を解いたのだ。

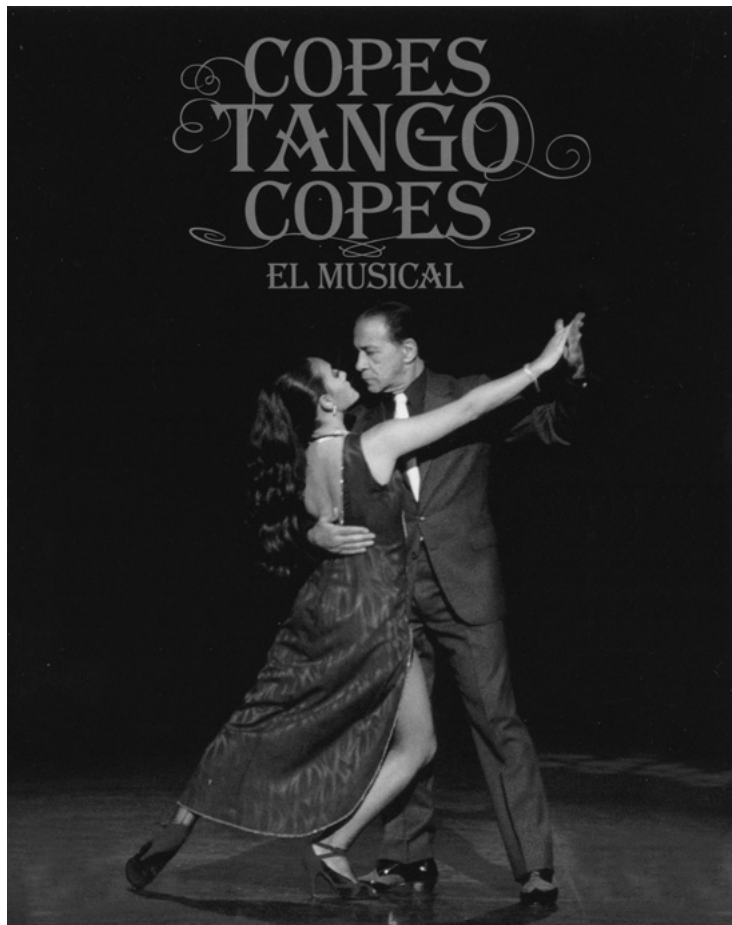
こうしてタンゴ・ダンスは紆余屈折を経てきたが、少しずつダンスに興味を持ち踊りを学ぶ人たちが増え始め、さらに発展の道を辿るようになった。

1940年代になるとあのリズムの王様と呼ばれたダリエンソ楽団とともに、タンゴ・ダンスもまさに黄金時代を迎えた。この時代のダンスのスタイルはサロンダンス（音楽を聴き優雅にゆったりと踊る）と呼ばれていた。

タンゴの踊りは、ブエノス・アイレスの低辺層で生まれ育ったが、その音楽の発展の歴史とともに、現在では芸術性を身につけながら世界中で称賛されるようになった。

私の愛するタンゴの精神は、永遠に多くの人々の心のなかに受け継がれ、さらに磨かれていくことだろう。

*Juan Carlos Copes : 1931年ブエノス・アイレスに生まれる。ダンサー。多くのショーに出演。最も有名な「Gotánショー」にも出演。



カンパラーチェ逍遥 (4)

レコード探索の心得 “執念は実る”

島崎 長次郎

かつて「盤鬼」と言われる人がいたと聞いたことがある。「盤鬼」とは、要するにレコードに関しては鬼のように強い執念を持つ人という意味なのだ。SP時代のクラシックのコレクターの話だったと記憶している。太平洋戦争が熾烈を極めた時代に、苦心して集めたレコードをどう守るかを真剣になって考えた末、断腸の思いでドイツ製の蓄音機と共に遠い信州の地に疎開させ、自らは死の危険と背中合わせの東京で、かつて耳に馴染んだ音を反芻しながら、それをエネルギーにともかく再会を信じて必死に生き抜いたと言う話だった。すべての音源が自由で豊富、しかも、いともたやすく聴ける現代からは想像も出来ない時代の話ではあるが、レコードを愛するものにとっては胸に響くエピソードと言えよう。

タンゴの世界にも「盤鬼」と聞いて思い出す人がいる。今から13年ほど前に仙台で亡くなられた寺田大作さんだ。ご存知の方も多いと思う。かつて荒川区の尾久で長いこと床屋さんを開いておられ“タンゴ床屋アモール”として当時は大変有名だった。私の知る限りではまさに「タンゴ界の盤鬼」と呼ぶに値する最高の人物だった。



寺田太作氏

昭和の初期に銀座の床屋に丁稚奉公に入り、その店のお客さんに教えられてタンゴ好きになったとのことであるが、やがてタンゴ熱が嵩じて何としてもタンゴの本場アルゼンチンに行きたくなり、考え抜いた末に南米航路の船の床屋さんになろうと決心し、商船会社に飛び込んでそれを実行したという。ところが時期が良くなかった。何でもニューヨークに着いた頃にあの忌まわしい第二次世界大戦が始まり、念願のアルゼンチン行きは成らず、泣く泣く引き返す羽目になってしまったというエピソードの持ち主なのだ。したがって、その時に持ち帰ったレコードはガルデルが最晩年の1935年に北米で録音した映画の主題曲、例の「想いの届く日」「ボルベール」などの入った3枚組のアルバム、たったの1冊だったと晩年に述懐しておられた。

レコードを本格的に蒐集するようになったのは戦後になり、疎開していた仙台から東京に戻ってからのことで、もっぱら中古レコード店を中心に、古道具屋や骨董店などを精力的に廻り、その収穫したレコードを来店するタンゴ・ファンに聴かせては満足顔を見せていた。氏は欲しいと思ったレコードがあると何処にでも出向くことで知られ、京都や大阪、

ときには九州にまでも出かけてゲットするのだった。狙ったものは逃がさないとも言われ、相手に懇請することはもちろん、時には執拗な説得で収集を試みるため、人によっては“寺田さんには手の内は見せられない”という声もあったほどだ。晩年近くなって、改めて仕切り直して2回ほど単独でアルゼンチンへレコード探索の旅をされるなど、とにかく亡くなるまでレコードへの執念を捨てなかったのも凄いことで、ちょっと真似のできないところがあった。

いずれにしてもタンゴのレコードに賭けた執念という点では、先ずこの人の右に出るものはいないと言え、まさにタンゴ界の「盤鬼」だったと改めて思う。

古道具屋や中古レコード店歩きを経験した者にとっては、苦勞して探し当てたり、出合ったりして手に入れたものは、全て可愛いもので、その一枚一枚に熱い思い出が刻まれている。そうした行為を突き動かしているのは一体何なのだろうか。一言で言えば“埋もれていたものを掘り起こす喜び”であろう。もっとカッコよく言えば“埋もれていたものを掘り起こし、再評価の機会を与える”という一種の執念と言えるかもしれない。

執念と言えば、その昔高山正彦先生からこんな話を聞いたことがある。戦前の或るとき、神田辺りの中古レコード店の前を歩いていたところ、窓側に積んであったレコードにフリオ・デ・カロの文字が見えた気がして、中に入ってそのヤマをめくっていたら敬愛するデ・カロのレコードが本当に出てきたのだそう。先生は「もともと僕は目が良いほうではない上に、第一、窓側とは言え店内の、しかもヤマに積んであるものの中にデ・カロなんぞの文字が見える筈がない。本当に不思議なことであるものだねえ」と言われた。これにはビックリで、ひたすらタンゴに燃えていた先生の執念のなせるわざを感じた。その時は曲名も「ティエラ・ケリーダ」(79924)と聴いたような気がするものの、どうもそのあたりは定かではない。

そこにいくと、私なんぞは足元にも及ばず、古道具屋歩き失敗談はしょっちゅうだった。あるときのこと、都電に乗っての通学途中、新宿から四谷に抜ける路線に乗って窓から外を眺めていたところ、或る古道具屋が目についた。ハッとして目にとまったのは紛れもないSPレコードの積まれたヤマだ。これは大変だと、咄嗟に次の停留所で降り、急ぎ足で取って返して店に行ってみたら、確かに1メートルほどの高さで円いレコード風のもので二山積んである。ドキドキしながら近付いてよく見ると、何とそれはただの円いお盆の山だったのだ。走る都電の窓から見えたのは確かにレコードだったのに……と無念の思いを噛みしめ、苦笑いをしながらすごとすごと引き返したときのことを、60年経った今でも忘れない。

これに対し、数こそ多くはないが、吾ながら“よくやった”と執念による勝利を味わった経験もいくつかある。そのひとつが或る古道具屋歩きでのこと。渋谷区の初台から浦和に住所を移した頃だから、確か昭和34年頃のことである。住まいの近くの北浦和の住宅地



高山正彦氏



を歩いていたところ、とある小さな古道具屋が目に入ったので、ふらっと覗くとさまざまな古民具などが積まれている片隅に200枚ほどのレコードの在庫が見えた。長期間積まれていたと見えてかなりの埃が溜まっていたが、とにかく店主に断って一枚一枚めくってみた。半分は戦前の流行歌や浪花節で、残りは戦後のいわゆる軽音楽やコンチネンタル・タンゴを含むセミ・クラシックなどで、筋としては決して悪くはない。だが、お目当てのアルゼンチンものは皆無で、見せてもらったお礼を言って店を出ようとしたときだった。店主の座っている側のヤカンの下に数枚のレコードがあるのが見えた。思わず足を止めて“済みませんが……”と断って、その下敷きになっていた数枚のレコードをめくっていたら、出て来たのだった。今でこそ珍しくはないが、国内盤で昭和の初期に発売された下の「O.T.V.」、それも2枚もだ。

<VÍCTOR> ORQUESTA TÍPICA VÍCTOR

◆ 79730 HILOS DE PLATA / TE FUISTE

◆ 79875 JULIÁN / PURA PIERNA

改めて、と言うほどではないが、最後まで気を抜かず探索することが、喜びとなって帰って来ることをそのとき覚えた。

(続く)

相次ぐ巨匠の訃

Mariano Mores (1922年生) が4月13日に亡くなっています。それより先に3月21日に Luis Stazo (1930年生)、4月11日には Ernesto Baffa (1932年生) も他界したそうです。巨匠の訃が相次ぎます。

(編集部)

アニバル・トロイロへの一考

高田幹雄(大阪市)

アルゼンチンタンゴを聴き始めて途中に5～6年のブランクがあるものかなりの年月を経ています。しかし未だ常に緒に就いた気持ちで聴き込んでいます。編集部から投稿依頼があり、色々の題材に思考を重ねましたが、纏まらないままとどのつまりはこのテーマに絞って見ました。

アルゼンチンタンゴを愛好される方々の中でテーマに掲げたアニバル・トロイロに就いて結構過小評価を成されていたと認識して居りましたが、最近はそのが払拭されつつあると聞き及んで嬉しく思います。

小生も従前より古典タンゴを諸先輩の導きにより愛聴しております。カルロス・ディ・サルリから始まりフアン・ダリエソ、フランシスコ・カナロ、フリオ・デ・カロなどはSPレコードコンサートでよく拝聴させて貰ったものです。しかし近年は加齢と共にと申しましょうか聴く嗜好の傾向に変化を来しています。

友人に勧められ「オスバルド・ブグリエーセ」と「アニバル・トロイロ」及び「アルフレッド・ゴビ」などに興味が湧き、殊に「アニバル・トロイロ」に傾倒してみようと現在色々聴き込んでいます。従ってご依頼の件のテーマをこの「アニバル・トロイロ」に決めました。

ご存じの通り「アニバル・トロイロ」はイタリア系移民の子として生まれました。名前がまた歴史的人物やギリシャ神話に出てくる人物の名を冠していることにも興味がそそられます。

アニバル (Aníbal) とはイタリア語読みでカルタゴの名将ハンニバルのことを指すそうです。またトロイロ (Troilo) とはギリシャ神話のトロイ王プリアモスの末子のトロイロス (Troilos) のことで、彼が20歳まで生きればトロイは攻略されなくなると予言されていたが、その前にアキレウスに殺害されたと言う。(注:本来はアニーバルと呼ぶべきでしょうがここでは通例通り敢えてアニバルと呼びます)

トロイロのタンゴの特徴はセンチメントな中に優雅で且つ華麗なメロディーと歌心溢れるハーモニーに有ると謂えるでしょう。

それに加えて歌の伴奏には特筆すべきところがあり、F. フィオレンティーノからA. マリーノ、E. リベーロ、R. ゴジェネーチェに至るまでの名立たる歌手と優れた作品



を生み出していることは言うに及ばないことです。アニバル・トロイロに関する記述は過去に先輩諸兄が各方面で著述されておりますのでここでの記載は遠慮させて頂き、以下のインタビュー記事を以って本稿に替えます。

アニバル・トロイロへのインタビュー (La Historia del Tango tomo 16より)

聞き手：Ricardo Yrurtia 記者：津森健吾

「タンゴは雰囲気と感性の原初の状況を維持しなければならない。それを型に嵌めようと試みるものは、それを歪曲し、卑小化することになる」

—何故あなたはバンドネオンを楽器に選んだのですか？

—子供の時分、私はひとつの音楽を時間をかけて聴いたものです。あらゆる楽器が鳴っていました—たいして困難もなく私はそれらを聞き分けられたのですが—私にとってそれが1台のバンドネオンのように思われました。それでバンドネオンは私の不安、悲しみ、喜びの排気弁であることを理解しました。

—あなたの修業の一時期、あなたのバンドネオンをクラシック音楽の演奏に使えると思ったことはありますか？

—そうですね。そう思っただけでなく、私の幸福な青春時代、クラシック作曲家の数点の作品を母と友達のために弾いたことがあります。

—あなたの作品の内、あなたの芸術的嗜好を完全に体現しているのはどれだと思えますか？

—歌えるものでは「スール」、インストでは「レスポンソ」ですね。

—それらに詩的—音響雰囲気を備えるために何に靈感を受けましたか？

—この質問に答えるのは簡単ではありませんが、感情の深奥を引用しなければならないのは疑いを容れません。詩人が「スール」の中で達成した並外れた情景描写—熱く深い音階の水彩画—が私に調性とハーモニーのアンサンブルの靈感を与えたことは明らかです。例えば「あの時お前から盗んだ接吻の下で情愛に震えたお前の20歳」というフレーズを前にしては、音楽家は自らが理想的な雰囲気へと運ばれ、美しい詩のメッセージによって音符と和音が溢れ出すのだと感じざるを得ません。「レスポンソ」に関しては、忘れえぬ詩人で友達のオメロ・マンシの思い出への深い感情のこもったオマージュです。

—どれだけの数の楽器でコンフント・ティピコを形成すべきだと思われませんか？

—そうですね、出来るなら—すべてが可能ではないので言うのですが—多数の弦楽器、バンドネオン5台、クラシック・ピアノとオーボエとかフルートのような木管楽器を持つてみたいものです。アルパも付け加えて。それが私にとって夢のコンフントでしょう。

—現在（タンゴのコンフントには）使用されていないが、他のジャンルのオルケスタを形成している楽器にはどんな不都合があるとお考えですか？

—あなたが金管楽器のことを言っているのなら、私の感性からすれば、その響きは我々のポピュラー・ミュージックの中では耳障りなものになってしまうと言えます。何故ならその音楽はあらゆる場合、優しさ（情愛）の恒久的写本ですから、過度に輝かしく、時に耳を刺すような音色の楽器によって演奏されるのを聞くのは耐えられません。

—ポピュラー・ミュージックのオルケスタはそれに生命を与えた特性を維持すべきだということ

に同意されますか？

—それが純粋なエッセンスである気候（雰囲気）を失うべきでないという意見には賛成です。が、技術的停滞には同意出来ません。インストゥルメンテーション（器楽編成法）は我々が生きている同時代の特性を提供すべきです。進化、そしてそれ故に革新が、民衆芸術を含めてあらゆる芸術の支配的要素になるべきです。

—あなたは作曲家として伝統的なラインの中に何故留まっておられるのですか、タンゴのモダナイゼーション（近代化）に向き合ったことはないのですか？

—失礼、あなたはタンゴの近代化をどう捉えているか聞いてもいいですか？

〔 説明：印象派の半音音階の使用、シェーンベルグの12音音楽、そして実際の音楽に隣接した、一層進化した幾つかの要素。 〕

—それなら、前の答えと同じ理由で、私は伝統的なラインの中に自分を維持していると答えねばなりません。つまり、我々のタンゴが持っている最良のものは、私にとって議論の余地なきことですが、それはその風土の外観でして、いかなるリズムの革新もそれを失わせるでしょう。

—その作品群の誠実さで以て、タンゴの勝利の基礎固めにより多くの力で貢献したとあなたが判断される作者の名前を挙げて貰えませんか？

—沢山いるので誰ひとり忘れたいのですが、何人かを挙げてみましょう。アローラス、バルデイ、コビアン、フィルポ、デルフィーノ、パスクアル・コントゥルシ、セレドニオ・フロレス、ディセポロ、マンシ、カディカモ、等等……音楽的、情緒的、詩的を問わず、彼等と同じ高みにいる何人かの新しい人達も忘れる訳にはいきません。

—時代の経過はタンゴの型の変化をもたらし、その特質の変質すら起こり得るとあなたは信じていますか？

—エゴイズムの過ちを犯すかも知れませんが、少なくとも私はそれを信じたくない、皆も同じように考えてくれたらいいのですが、何故ならタンゴがタンゴで有り続けるために、タンゴの運命は変わるべきでないと信じているからです。

—民衆の歌にあなたはどんな未来を予測されますか？

—前に答えた通り、我々の愛するタンゴはちょっとやそっとでは消えてなくなるでしょう。タンゴに対する私の愛情はそれが永劫のために生まれたと私に考えさせるのです。

以上、上記のインタビュー記事やその他トロイロの関連著書を読む中に彼の人となりやタンゴに打ちこむ情熱が窺い知れます。今後益々彼の作品を聴き込んで行きたいと存じます。



José Razzano Francisco Canaro
Osvaldo Fresedo Aníbal Troilo Enrique S. Discépolo
1944

タンゴへの思い

水野 中(埼玉県ふじみ野市)

太平洋戦争が終わったのは、私が小学校2年生の夏であった。戦後米軍が駐留してからラジオ放送が大きく変わり、これまで聴いたことの無い、ジャズ、シャンソン、タンゴ等の音楽がよく流されていた。特に駐留軍向けの「FEN」は、ジャズやポピュラー音楽が多く、兄がよく聴いていた。当時は、ラジオは一家に一台の時代であり、嫌でもそれを聴かざるを得なかった。高校生になってからは、本格的にジャズやシャンソン、映画音楽を好んで聴くようになり、ベニー・グッドマンやグレン・ミラー、ジョージ・シアリング等を聴いていた。



事情があって大学進学をあきらめ、夜勤のある積水化学というプラスチック製品の製造工場に就職した。当時兄が、東京都庁内にあった都民劇場の音楽サークルの会員だったので、私も加入しクラシック音楽を楽しんでいた。勤務先にも労音のサークルがあり、入会を勧められていたので、一年足らずで都民劇場はやめ、労音に鞍替えした。当時の労音はクラシックが主体であったが、ポピュラーミュージックを取り上げるようになり結構楽しめた。夜勤があるのは案外便利であった。夜勤の初日、夜勤明けの昼間に自由時間が取れることであり、これを利用し、池袋、新宿、銀座、渋谷などの盛り場を歩き、何処に何があるか覚えた。そうした中で、クラシックは「らんぶる」(銀座・新宿・池袋)「ライオン」(渋谷)「寿苑」(御徒町)を見つけよく通った。池袋の「らんぶる」に通ううち、タンゴ喫茶「らん」を見つけ通うようになった。タンゴは、兄がラジオで聴いていたので知っていたが、これがタンゴを本格的に聴くきっかけになった。

渋谷の「ライオン」の帰りに、宇田川町の生演奏が聴ける「プリンス」を見つけ、後日行ってみた。当日の出演は、「小沢泰とオルケスタ・ティピカ・コリエンテス」であった。ライブはレコードで聴くのと違い、演奏者の表情や身体の動き、そして何よりも臨場感が素晴らしく、すっかりはまってしまった。調べて見ると御徒町の「金馬車」、銀座の「コロンビア」、新宿の「ラ・セーヌ」、「コンサート・ホール」があるのを知り、これらのタンゴ喫茶に出入りしていた。しかし安月給では、そうそう遊んではおれずタンゴ喫茶通いも減りつつあった。そんな折、勤務先の現場の課長が代わり、労働条件の変更が提示されたのでそれに反発し、課長と話をしたが聞き入れられず「嫌なら辞めろ、代わりは幾らでもいる」と言われ、翌日退職届けを叩き付け辞めてしまった。すぐに職探しを始めたが、

簡単には見つからずタンゴどころではなくなってしまった。

私の住まいは、埼玉の人口6千人弱の寒村であった。昭和33年に日本住宅公団が、東武東上線の上福岡駅の西側に1800戸、東側に2000戸の大団地の建設を始め、完成は翌34年の10月と聞いていた。昭和34年の春頃と思うが、外出から戻ると、父から村役場の総務課長が訪ねてきて、私が遊んでいるのを知り「人手不足で困っているの、役場に勤めてほしい」との事であった。公務員になる気は無く放っておいたが、再三総務課長が訪ねて来られ、「腰掛けでも良いから来てくれ」といわれ、気の毒になり、その年の10月から村役場の職員になった。配属部署は、税務課の徴収係りで、税金滞納者の自宅を訪ね、税金を取り立てる嫌な仕事である。オマケに給料の安いのにビックリ、月給6790円であった。積水化学では19000円ほど貰っていた。失業保険でさえ週に2000円だった。嫌な仕事に安月給、辞めてしまおうかとも思ったが、半年前に入った先輩職員から「少し我慢をしてみろよ」といわれ我慢をすることにした。少ないとは言え定期的にお金が入るのは有難いことである。

秋葉原に行き、中古のアンプ、スピーカー、レコードプレーヤーを買い、ようやくレコードが聴けるようになった。SPからLPに代わった時代で、LPは高く手が出ないので、EP盤しか買えなかった。最初のレコードは、バルナバス・フォン・ゲッツイの「碧空」と「夜のタンゴ」のカプリング盤を買い、以後フランシスコ・カナロやロベルト・フィルポ、オスバルド・プグリエーセ等ボチボチと集め楽しんでいった。1961年12月フランシスコ・カナロ楽団がの来日を知り、一番安い500円席を購入し聴きにいった。コマ劇場の最上階最後列であったが、音、雰囲気など充分に楽しめた。当日のプログラム、入場券の半券は、今でも大事に保存している。カナロの来日を契機に1964年には「キンテート・リアル」、65年には「オスバルド・プグリエーセ」が労音の招聘で来日した。キンテート・リアルは初めて聞く名で、メンバーの名もフランチェニしか私は知らなかった。演奏は、斬新なアレンジで、これまで聴いてきたタンゴとは大きく違い、各プレイヤーのソロを取り入れた素晴らしい演奏であった。プグリエーセ楽団はレコードで聴くのと違い、期待に違わず素晴らしい演奏であった。セステート・タンゴの面々が退団する前の演奏が聴けたことは幸運であった。この公演の後、フロリンド・サツソーネ、アルマンド・ポンティエル、ファン・ダリエソ等名流楽団が毎年来日するようになり、1970年民音招聘のホセ・バツソ楽団の来日以降、民音タンゴシリーズとして現在まで続いており、でき得る限り聴きに行くようにしている。

振り返ってみると1957年から1970年頃までは、よき時代であったと思う。都内に出れば、どこかでタンゴを聴くことが出来た。しかし、1958年2月日劇の「ウエスタンカーニバル」の公演を契機にロカビリーの台頭、さらに1962年10月の「ビートルズ」の出現により、これまで親しまれてきたタンゴやシャンソン、スウィング・ジャズ、ラテンなどの音楽が、ラジオやテレビから消えて、日本の音楽シーンが大きく変わってしまった。タンゴ喫茶も新宿の「シャンテ」「コンサート・ホール」「ラ・セーヌ」が、69年から70年代初めころまで残っていたのを覚えているが、何時無くなったのだろうか。この頃、我が住まいのある町も人口が5万人を超えたので、1972年4月市に昇格した。60年代後半から70年代頃まで

は、人口増で仕事が増えたのに職員は増えず、残業の毎日、休日も月に2日しか取れない状態で、タンゴどころではなくなった。しかし、毎年来日するタンゴ楽団だけは、聴きに行くようにしていた。この時代はラジオ・テレビでタンゴに接することは少なくなっていたが、1980年代の中頃、新宿にラテンとタンゴをやっている「エル・パティオ」を知り、続いて京王プラザホテルの「コンソート」、NSビルの「ミノトール」を見つけた。「コンソート」は、シャンソンとタンゴを、「ミノトール」は、各種ジャンルの音楽を日替わりでやっていたので、タンゴの時には行くようにしていた。「コンソート」が無くなり、代わりに赤坂に「ノスタルヒアス」が開店したので、「ミノトール」と「ノスタルヒアス」には良く通った。この時期は、タンゴを介して知った友人も多数でき、現在も交流が続いている。

近年民音の公演や、民音以外の主催の公演で感じるのは、来場者に高齢者が多く、若い人が極端に少ないことである。民音公演の出演者は2011年頃から世代交代が行われている。日本のタンゴミュージシャンも、有能な若手が確実に増えているのに、聴く側は相も変わらず、高齢者ばかりなのは何故なのだろうか。しかし、このことは私が聴きに行った公演のみの状態であり、都内・近郊では、数多くのコンサートが行われており、その状況は充分には把握していないが、若い人々が来ているのかも知れない。たまに顔出しする雑司が谷の「エル・チョコクロ」には若い人も来ている。私が主催するCDコンサートには若い人の参加は皆無である。20代後半の人や、30代の人に「タンゴを聴いて見ませんか」と聞いても「タンゴって何ですか」と言われ、若い人にはタンゴは知られていないようである。最近、アイススケートのフィギュアの音楽にしばしばタンゴが使われたり、コマーシャルにも使われているが、あれがタンゴであることを知らないようである。多くの人々にタンゴを知ってもらうには、ラジオ・テレビなどでタンゴの番組を増やすことが一つの方法ではなかろうか。ラジオ・テレビからタンゴ番組が少なくなった。1960年代の終わり頃から1970年代の中頃までNHKテレビの「世界の音楽」で、アルゼンチンから来日したファン・カンバレリ、ホセ・バッソ、エクトル・パレーラ、フランチェニ＝ポンティエル楽団の演奏が放映された。1988年には、マリアーノ・モーレス、アルフレッド・ハウゼ楽団の来日公演や、その後来日したタンゴ楽団の公演を取り上げてはいるが、その数は極めて少ない。見聞きする機会が増えれば、タンゴを知る人も増える筈である。当然のことながら、放送界も世代交代が行われ、ディレクターやプロデューサーがタンゴを知らない世代になったことも、タンゴ番組が少なくなった要因の一つだろう。民放はスポンサーで成り立っているので難しさがあると思うが、唯一NHKは視聴者からの視聴料で運営している放送局であり、やる気があれば出来ることと思う。是非タンゴの番組を増やす努力をして欲しいものである。ただし、1990年代の終わりごろNHKに「ときめき夢サウンド」という番組があった。タンゴも取り上げていたが、タンゴを全く知らないと思われる司会者だったり、タンゴを歌ったことの無い歌手に歌わせたり、タンゴを演奏などしたことがないと思われる者に演奏させたりする陳腐な番組作りをしていたが、これは止めていただきたい。日本には、ベテランのタンゴミュージシャンも健在であり、有能な若いミュージシャンも育ってきている。これらの人々を出演させた、まともなタンゴ番組を作り、放送して欲しいものである。

歌にかけた青春の目々

川名 久仁子(江戸川区)



私は四歳の頃、学者だった父の仕事の関係で茨城県に移り住み、至って静かな家庭に育ちました。戦後間もない頃であり、音楽に関する本や楽器も身近になく、音楽とはまったく無縁な環境で子供時代を過ごしました。

音楽との出会いは高校に入学した頃、偶然ラジオから流れてきた淡谷のり子が歌う「夜のプラットホーム」を聴き、強烈に心を突き動かされた時でした。それから淡谷のり子が歌う、服部良一作曲の歌を好んで聴くようになりました。

歌う喜びに目覚めたのは、高校二年生の文化祭で独唱をしたのがきっかけでした。この頃から音楽の道に進みたいという思いも強くなりましたが、音楽に関する勉強は皆無で、音楽大学に進路変更することなど間に合うはずもなく、半ばあきらめかけていました。しかし、私の希望を母から聞いた父が色々調べてくれて、「東京声専音楽学校（現・昭和音楽大学）」の予科で音楽の基礎を一年間勉強できることがわかり、この学校に進学を決めました。

予科に入学してからは、音楽の基礎であるコーリューブンゲン、コンコーネ、ソルフェージュ、聴音、新曲、楽典、ピアノの特訓が始まり、音符との格闘の日々が続きました。

学校では授業の一環として年に一度本格的なオペラを公演することになっており、合唱のパートの授業もありました。予科に入学して一年もたたない十二月に「カルメン」を公演することになり、それまで見たことも聴いたこともなかったオペラに出演しました。オペラにはこの学校の創立者で学長でもあるオペラ歌手の下八川圭祐氏もエスカミリオ役で出演、指揮はマンフレッド・グルリット氏、オーケストラは東京フィルハーモニー交響楽団、会場は日本青年館でした。当時田舎から上京したばかりの私にとって夢のような経験で、深く感動したことが思い出されます。

翌年本科（教員養成科）に進みました。そこでは下八川圭祐、越賀理恵、永井智子の各氏に師事し、声楽を本格的に学び、二年後の卒業時にはNHK新人演奏会に出演することができました。

その後オペラ専攻科に進み、メゾソプラノとして下八川圭祐、アリゴ・ポーラ、ニコラ・ルッチの各氏に師事し、発声（ベルカント唱法）、オペラのアリア、イタリア・フランス歌曲などを一年間学びました。卒業時に読売新聞社主催でフランスオペラが来日し「カルメン」を公演した際には、藤原歌劇団合唱部とともに私も参加することができました。

この年、二期会合唱団のオーディションに合格し入団しました。二期会では合唱団のリサイタルや学校巡りで抜粋の演奏会形式でのオペラ「カルメン」のカルメン役を歌いました。更に、二期会が公演するオペラ、レコードの吹き込み、民音労音の演奏旅行で北海道から九州まで日本全国を飛び回るなど、忙しい日々を過ごしました。その間、日伊音楽協会主催（ヴェルディアーナ）演奏会に出演。またNHK主催でイタリア歌劇団が来日した際には、日本のプロ合唱団総動員で「仮面舞踏会」「トロヴァトーレ」「ドン・カルロ」の三種目に出演しました。本場の一流のオペラ歌手のベルカントの肉声を目の当たりに聴いたときは、これが人間の声かとただただ驚くばかりでした。そしてイタリアの一流のオペラ歌手と同じ舞台上に立てたことは、私の人生の中で貴重な一ページとなりました。

四年間の二期会合唱団在籍後には、藤原歌劇団のオペラ公演で「トスカ」の牧童、「フィガロの結婚」のマルチェリーナ、「セビリアの理髪師」のベルタ、その他のオペラに出演しました。またこの頃コロムビアレコードのオーディションに合格し、「ホフマンの舟唄」「荒城の月」「花」「ペチカ」「雪の降る街を」などのレコードを吹き込みました。

その後は結婚十年目に娘に生まれ、子育てに専念する日々となり、歌うことから遠ざかってしまいました。子供が高校に入学したのを機に、色々なジャンルの歌へのチャレンジもしてみましたが、どれも物足りなさを感じ、長続きしませんでした。

そして二十年以上の長いブランクを経た今から四年前に、読売カルチャー教室の「タンゴを歌おう」のパンフレットが目にとまり、以前からバンドネオンという楽器にも興味があったので、タンゴを勉強してみようと思い立ち見学に行きました。講師は阿保郁夫先生でしたが、面識もなく、世界的なタンゴ歌手とも知らなかったのが気兼ねな気持ちで入会しました。

最初のレッスン曲は「カミニート」でした。楽譜、スペイン語詞、訳詞、カセットテープを頂き、家に帰ると取る物も取りあえず自分の音域に移調し、ワクワクしながら歌ってみました。初めて歌ったタンゴは素敵な曲だったし、歌詞の中に私の好きなアザミの花があったので、嬉しくなりレパートリーの一曲にしました。

その後タンゴのコンサートに行ったり、CDを聴いているうちに、魅惑的な旋律、胸にジーンと痺れる強烈なリズム、バンドネオンの心に染みわたる哀愁漂う音色にすっかり魅了され、私が求めていた歌はこれだと、遅滞きながらタンゴ一色の張り合いのある生活となりました。

レッスンを重ねていくうちに、心が震えるような妖しい秘めたる情感を歌い上げなければ、聴衆の琴線に触れることはできないと感じました。まずは真摯に楽譜と向き合い、音符を正確に把握した上でCDを聴き、その歌の持つ心情をどの様に表現するか胸の中にしっかりと刻み、後は感じた心のままに歌える様にと練習を楽しんでいます。

現在は淡路七穂子先生にタンゴの真髄を学びながら、心に栄養たっぷりのレッスンを受け、至福のひと時を満喫しております。少々遅きに失した感はありますが、晩年にきて心豊かな日々が用意されていたことを神に感謝しています。この幸せな時間が少しでも長く続き、自分の好きな歌のレパートリーを、楽しみながら増やしていけたら本望です。

日本タンゴ・アカデミーの皆様、今後ともご指導宜しくお願い申し上げます。

タンゴストーリー

「パンパの風の中で…」

寺本 千栄子(市川市)

秋から冬へと移るこの時期、太陽が沈む頃毎日決まってパンパから冷たい風が吹いてくる。風はいつもかすかに乾いた牧草の臭いを運んできた。

強風を避けるように寄り添って出来た小さな村があった。村は決して裕福ではなかったが、そこに住む人々は自然に助け合う心を持っており、昔から固い団結心で自分達のこの村を守ってきた。



今、大きな太陽が遙か遠くの山並みに沈もうとしている・・・太陽は一日を惜しむかのように最後の力で輝きを放ち、草原の空を真っ赤な夕焼けに染めていた。

夕焼けに照らされた草原では gaucho 達が馬を駆って牛の群れを集めている。日暮れと共に牛たちは草原からそれぞれの家の囲いの中に集められるのだ。そして夜を囲いの中で過ごし、夜明けと共に又草原へと放たれる。毎日そうやって牛達は草原の新鮮な草を食べ村の人々に温かいミルクと美味しい肉を提供してくれていた。

農民達は汗を流して草原を耕し、小麦、大豆、トウモロコシなどの農作物を作った。

小さな村は昔から gaucho も農民もこうして変わることなく日常を営み、その中で人々は支えあって生きてきたのだ。

1 BARRIO POBRE (貧しい町)

フランシスコ・プラカニコ楽団

1927年録音

曲：Vicente Belvedere

そんな村にもいつか時代の波が押し寄せて来た。村の人々は偉い政治家の巧みな言葉によって“今より豊かな生活が出来る”・・・との甘い欲望を掻き立てられた。

“豊かな生活”は村の人々の夢であり、希望だった。でも、豊かさを得るには払わなければならない代償もあった。

2年前、ひとりの若者の命が犠牲になった。それが豊かになることへのひとつの代償だったとしたら“豊かさ”・・・とは一体何なのだろう？

今、老人が(年老いた父)、古いデッキチェアに身体を沈めて遥かかなたに落ちてい

く夕陽に眼を向けている。老人の眼が夕陽を見ているのか見てはいないのか判らなかつたが、その顔には深い悲しみの皺がいくつも刻まれていた。

老人の息子は死んだ・・・2年前に“豊かさ”を得るための争いで死んでしまったのだ。性格の真っ直ぐな息子だった。

老人はいつも息子に言っていた。「どんな事があるうと偉い人の言う事に逆らってはいけない」と。

それなのに、息子は正義感が強すぎたばかりに！

老人はとても後悔していた・・・

“息子をあまりにも真っ直ぐに育ててしまったのだ・・・”

そのことが、どんなにか悔やまれたことか・・・

そして、息子の死というこの余りに大きすぎる悲しみは生きてる限り決して消えることはないのだと嘆いた。

2 ARREPENTIDO (後悔)

1927年録音

フアン・マグリオ “パチョ” 楽団

曲：Rodolfo Sciammarella

昨日、父さんはひとりでお墓まいりに行ってきた。お墓にはお前が好きだった料理がたくさんお供えしてあって、母さんが来ていた・・・と、すぐに判ったよ。

でも、母さんは私に、

「あの子はどこまで行っているのでしょうか？ もう2年も経ったというのにまだ戻って来ないなんて・・・」って云うのだよ。母さんは認めたくないんだ・・・お前が死んで事さ・・・認めたら、今以上に辛いからずっと知らない振りをしてる。母さんにとってお前はかけがえのない宝物だったんだ！ お前の死を認めない事で、母さんは辛うじて生きている・・・父さんにはそんな風に見えるんだ。だからあの日以来母さんは神様に膝まずいて、毎日とても長い時間祈っている。

そんな母さんを見ていると私の心は張り裂けそうだよ！

3 SOLEDAD (孤独)

1933年録音

トリオ・シリアコ・オルティス

曲：Ciriaco Ortiz

いつしか、老人はウトウトと夢を見ていた。

今は居なくなってしまった息子が、夢の中では幼い子供に返っていた・・・その幼く小さかった息子が私に一生懸命語りかけている・・・

「父さん、あのお山の向こうには お日様のベッドがあるのかな？・・・だから、お日様は夜になるとサヨナラ～ってお山の中に消えていくのかな！」

「父さん、僕もいつか父さんみたいなガウチョになってお馬に乗って走りたいな～！」

ガウチョの暮らしは決して楽ではなかったけれど、私と母さんは幼いお前が成長してい

く姿にどんなにか大きな喜びを貰ったことだろう！ お前が居ることで毎日楽しく暮らしていった。いつしかすくすくと成長していったお前。

父さんと母さんは大人になっていくお前の姿が眩しくて、嬉しくて、心から感動したものだ。そうさ！ お前の未来は大きく広がっていたんだ！ だがあの日、突然お前の未来は断たれてしまった。

その日から私達の喜びも永久に消えてしまったのだ・・・

4 HONDA TRISTEZA (悲しみの底) 1931年録音

ロベルト・フィルボ楽団 歌 プリンシペ・アスール
曲：Roberto Firpo 詞：V. Planella del Campo

お前が青年になった時、不景気の波がこの国を襲った！ 私達の村も不景気に巻き込まれてガウチョ達も農民たちも殺気だっていた。

そんな時、よそから政治家なる者が、押しかけてきて村の人々に言ったんだ。

「今度の選挙でこの私に投票すれば、この村は今よりずっと裕福になれる！」と。

でも、息子はよそ者の偉い政治家を批判して叫んだ。

「この村を守るのは自分達の尊敬する親方だけだ！」「親方、万歳！」

あの忌まわしい事件はこの時起きた。

父さんはお前が飛び出して行ったのを止めることが出来なかった！ お前はよそ者の取り巻き連中によって、私の目の前で無残に刺し殺されてしまったのだ。

老人のこの悲しい夢は、息子の胸に突き刺さったナイフの冷たく鈍い光と・・・

声にならない悲痛な叫びをあげている自分がいて・・・

いつも必ずここで涙とともに眼が覚めた。

5 DIOS TE SALVE, M'HIJO (神様がお前を助け給うように 息子よ)

歌 アグスティン・マガルディ 1933年録音
曲：Agustín Magaldi 詞：Luis Acosta García

あれから2年の月日が流れ、村の人々の暮らしも少しずつ変わってきている。

何も無かった村の中に酒場も出来た。そこでは、人々が一晩中、歌ったり、踊ったり、喧嘩したりしている。“豊かさ”とはこういうものだったのか？

広いパンパから吹いてくる風の中で、これからもお前が居ない寂しさを抱き続けて父さんと母さんは生きていかねばならない・・・心の痛みは増していくばかりだというのに！

その時、ひと際強く吹いてきた風が老人の顔を撫でるように吹き抜けていった。

その瞬間、“息子が風になって戻ってきた！”と老人は確かに感じた。

老人はハラハラと涙をこぼした。そして神様に祈った！

「ああ、神よ！ パンパから吹いてくる風の中に息子が居ました！」

それから老人は祈っている妻を労るように話しかけた。

「どうかもう悲しまないでくれ、さっき息子はパンパの風になって確かにこの家に戻ってきたよ・・・これからは、いつだって風の中に息子は居て私達の事を見守っていてくれるのだよ！ だから、もうそんなに悲しまないでくれ・・・そして、ふたりに神様をお願いしようじゃないか！ どうか、パンパの風が毎日吹きますようにと・・・」



6 PAMPERO (パンパの風)

1948年録音

オスバルド・フレセド楽団

歌 ロベルト・ライ

曲：Osvald Fresedo

詞：Eduardo Bianchi

その日から、老人と妻は毎日夕暮れになるとふたり寄り添って神様に祈った。

“パンパの風になった息子が

今日も私達の家に戻って来てくれますように・・・”

ミロンガパーティー開催のお知らせ

NTA 主催の第6回ミロンガパーティーが今年は9月に開催されます。

日 時 2016年9月22日(木曜祭日) 18:30～21:30

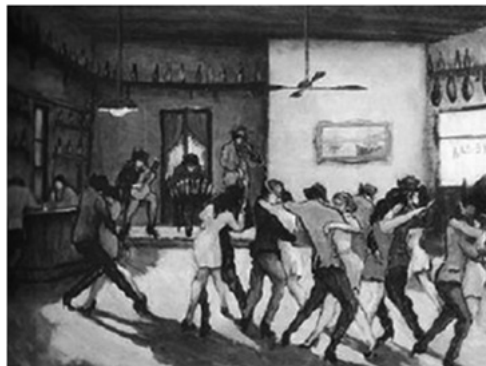
会 場 いきいきプラザ一番町 カスケードホール

参加費 2,500円(要事前申し込み)

演 奏 メンターオ五重奏団

ダンスデモ GYU

演奏を聴く人もダンスを踊る人も広い会場で共に楽しむ事ができます。





池田みさ子とロス・アミーゴス を聴きに行った

鈴木 茂次(埼玉県日高市)

池田みさ子とロス・アミーゴスのコンサートが2015年12月5日(土)の15時から東京狛江市のエコルマ・ホールで開かれた。会場アクセスは良くて小田急線狛江駅前の複合施設であったが、エレベーター口に、この728席の会場が満席との張り紙を見て、その盛況ぶりを知った。そして池田みさ子にとっては地元であり、また父君の故池田光夫氏と共演した謂れのあるホールとのことだった。

プログラム構成は1部では古典曲、コンチネンタル・タンゴ、日本の曲とバラエティに富んだものであり、2部もピアノソラの曲が入るが、ほぼ同じ構成となっていた。

幕開け1曲目はフアン・ダリエソ・メドレーがリズムカルにそのスタイルで演奏された。改めて気づくのは楽器配置がピアノを中央に据え右にバンドネオンとベース、左にバイオリンという珍しいものであった。メドレーの4曲目「ラ・プニャラーダ」でダンスのエンリケ&カロリーナが舞台両袖から登場して軽快に踊り、花を添えた。その後、立ち上がった池田みさ子が今日の盛況のお礼とこのコンサートは一年掛りで進めてきたもので、併せて行ったCD製作も今日のメンバー(CDはキンテート)で録音し、開催に至ったことは大変感慨深いと挨拶があった。そういえばピアノとバンドネオンの間に、池田光夫使用のバンドネオンが置かれてあり、その上に赤い一輪の花が添えられていたが、それもその思いの一つであったのであろう。

その後も彼女のMCが進められたが最後まで音量不足で聞き取りが悪かったのが少々残念であった。次の2曲目の「エル・チョコロ」では比較的モダンなスタイルで、3曲目の「タンゲーラ」はほぼフランチェニ&ポンティエルがベースのスタイル、続く「真珠採りのタンゴ」はアルゼンチン・タンゴの味付けで演奏された。

その後にメンバー紹介でコントラバス齋藤順、バンドネオン池田達則と鈴木崇朗、バイオリン吉田篤と専光秀紀、そしてピアノ池田みさ子とし、次に登場のボーカル西澤守が歌うのは「カミニート」と紹介して演奏に入ると共に西澤守が登場した。彼はポップス歌手としてスタート、俳優としても活躍し、後タンゴ歌手に転じ、渡垂してブエノスアイレスの楽団との共演も果たしたという。この曲は歌い易い曲かとは思いますが、やはりベテランらしい歌いぶりであった。その後はピアノをフィーチャーした「降る星の如く」である。その導入部はオリジナルなアレンジで、その後はほぼマデルナのスタイルで演奏された。7曲目はワルツの「オルガ」でダンスが入り、ややゆったりした感じで踊られた。8曲目コンチネンタル・タンゴで最も有名な曲「ジェラシー」を、今やタンゴのバイオリンで第一

人者になりつつある吉田篤をフィーチャーして、導入部のバイオリンソロからをたっぷり聴かせた。次の曲はタンゴ歌手であればきっとレパートリーの一つであるガルデルの「わが懐かしのブエノスアイレス」を再び登場の西澤守が熱唱した。

父の池田光夫は日本の歌謡曲にも造詣が深く、その多くをタンゴにアレンジして演奏したが、次の曲「津軽海峡冬景色」もその遺産であろう。私的には始めの“ジャジャジャジャン”はそのまま使って欲しかった（ホセ・リベルテラの演奏ではそれが使用され、続くフルートのメロディーもオリジナルのままであった?）。1部の終わりは「バンドネオンの嘆き」であったが、暗転から前述のバンドネオンにスポットライトが当たり、男性の声でこの楽器を擬人化して問いかけるナレーションが流れ、そこにダンサーの影が映る演出から、演奏とダンスが始まった。演奏スタイルはこの曲をさらなる名曲とならしめたアニバル・トロイロのそれである。バンドネオンも2台で厚みを増してその魅力は充分であった。さらにダンサーが巧みなステップと舞いで華やかに彩った。

休憩後の2部の演奏はサプライズの演出で始まった。1曲目のその曲はジブシーメロディーに起因する「チャルダッシュ」を弾きながら吉田篤が舞台下手から現れたが続くメロディーをコントラバスの齋藤順が引き継ぎ、そのあとは同じフレーズを弾きながら客席後方から専光秀紀が登場し、その後吉田も客席に降りて交互に弾きながら舞台に戻り演奏を終えた。お客は大喜びであったが、どうもこの演出は池田みさ子がやりたかったようだ。続く曲はCDと同じくインストバージョンの「想いの届く日」であったが、ピアノを主体にそれぞれ楽器にガルデルメロディーを素直に歌わせるアレンジであった。次はピアノのリーダーが好む?ホセ・コランジェロ&エルネスト・バッファ作曲のミロンガ「ゼロ砦」を軽快に演奏した。そのあとは西澤守の歌で、前述のバンドネオンに語り掛けながら歌うのは「郷愁-ノスタルヒアス」であった。前半をバンドネオンのみの伴奏で歌い、後半はその感情の高まりを全楽器の伴奏にのせて歌い終えた。さて次はピアソラ2曲だ。彼女曰く若いお客様もいるからとの前置きであったが、本国ではこれらはもはや前衛ではない、クラシコだ!と聞いてから10数年だと思うが、曲は「ブエノスアイレスの冬」に続いて「リベルタンゴ」である。前者は静かにゆっくりと始まるメロディーが印象的であるが、この前半から終わりまでこなれた演奏で聴かせ、また後者はお馴染みのメロディーを各楽器がリズムカルに歌い、これに乗ってエンリケ&カロリーナが踊った。その後再び歌でカナロの歌の曲では最高傑作とされる「最後の盃」であった。これを西澤守が登場して日本語歌詞の一部を語ってから歌ったが、今日一番の歌唱だったと思われた。

つぎは池田光夫作曲の「二人だけの夜」だが、私もCDで聴いてすっかりお気に入りの曲になっていた。彼女曰く、父がどのような気持ちで作ったか聞かなかったという。しかしその日本的なメロディーを聴くと作曲者がそのほろ苦い青春の思い出を楽譜に乗せたと思われ、そしてその演奏はCDと同じような感情を私にもたらした。つぎは名曲「パリのカナロ」で、この演奏で興味を引いたのが演奏スタイルはほぼダリエンソのそれと思われたが、後半のバンドネオン・バリエーションのパートをプグリエーセと同じコントラバスが弾いていたことであったが、いずれにしても各プレーヤーの演奏が堪能できた。そしてプログラム最後の曲エドガルド・ドナートの「台風」となった。ここではまず台風を思わせ

る強風の音が響く中、客席後方から登場したエンリケ&カロリーナが舞台上上がったところで演奏が始まり、ダンスは演奏と共にキレの良い振付で踊られ、終曲の盛り上がりに合わせてポーズして終えた。

フィナーレでは全員並んで挨拶して退場したが、観客の拍手に応えるかたちでアンコール曲の演奏となり、曲はもちろん「ラ・クンパルシータ」である。CDと同じく、やはりピアノ奏者のホセ・コランジェロのアレンジによるものであったが、ピアノで始まり各楽器を聴かせて再びピアノで終わる構成だ。そして再びダンスが加わり大いに盛り上がって終演となった。

哀愁に満ちたアルゼンチンタンゴの名曲を
池田みさ子とロス・アマリーゴス

2015.12.5 (土) 15:00開演 (14:15開場) 全席指定 ¥3,500

狛江エコルマホール

エコルマホール 03(3430)4106

チケット2番 http://pia.jp/ 0570-029999(アコード272-686) Odakyu DX 駅直結 7家CCShop 指定席のみ

ECORMA HALL

ライブ情報をお伝えします

Tangueando en Japón 誌にこれまで掲載していた「首都圏タンゴ・コンサート情報」を今後は“これから各地で開催される”「タンゴ・ライブ情報」に切り替えます。昨今NTA会員の演奏家も各地で積極的にライブ演奏を行っておりますので、会員が努めてライブ演奏を聴きに行けるよう、出来るだけ情報をお送りして行きます。首都圏に限らず各地で開催が予定されている活動をお知らせください。

情報提供は新しいホームページが立ち上がり次第、ホームページに移行する予定です。



「タンゴ心酔クラブ」 100回記念に参加して

大澤 寛

2015年12月6日曜日13時から開催の「タンゴ心酔クラブ」第100回記念コンサートに参加した。会場はいつもの「かながわ労働プラザ」。この会が発足したのは1999年（平成11年）の由。配布された冊子には“コンサート100回記念～その16年を振り返る”という見開き2頁の記事がある。発足時から現在までの開催場所の歴史によれば、現在の「かながわ労働プラザ」になったのは2001年の第13回から。この短い記事には、その時々々のタンゴに関する内外の大きな出来事が簡潔に記されている。来演した外国のアーティストたちの名前、会員の親睦旅行で何処を訪れたかの記録、そして心を打たれるのは故人となられた方々のお名前が出て来ることである。“その当時あの方は元気だったのだ”という思いに囚われる。

この日のコンサートの構成は3部建て。

第1部は年末特集「今年聴いて最も心に残った“この1曲”」をテーマに13名の会員が、島崎長次郎さんの軽妙な紹介・進行のもとに“今年の1曲”を披露した。遠方からも3名の方々が参加された。登場された順に吉澤義郎(吹田)、吉岡達郎(四日市)そして井上潤(姫路)のお3方である。簡単に発表者氏名・曲目・演奏(者)楽団名を紹介して置く。

- | | | |
|----------|------------------------------------|------------------------|
| 1. 笠井正史 | De tal palo (この親にして) | V. ラバジェン・トリオ |
| 2. 池永博威 | Visión celeste (空色の風景) | J. ダリエンソ楽団 |
| 3. 中村尚文 | La musa mistonga (ラ・ムサ・ミストンガ) | A. フェラサーノ楽団 |
| 4. 脇田富水彦 | Don Agustín Bardi (ドン・アグスティン・バルディ) | Orq.Típ. カテナーチョ |
| 5. 宮本政樹 | Libertango (リベルタンゴ) | ヨー・ヨー・マ |
| 6. 齋藤富士郎 | Racing Club (ラシング・クラブ) | ジ・アレックス・クラブ・タンゴ・セクステット |
| 7. 吉澤義郎 | De menor a mayor (デ・メノール・ア・マジョール) | V. ラバジェン・トリオ |
| 8. 吉岡達郎 | El pensamiento (エル・ペンサミエント) | J. マグリオ・パチョ楽団 |
| 9. 井上 潤 | Paciencia (忍耐) | アストロリコ四重奏団 歌・KaZZma |
| 10. 大澤 寛 | El bazar de los juguetes (玩具屋) | M.カロー楽団 歌・A. ポデスター |
| 11. 佐藤光男 | Angustia (苦悩) | F. カナロ楽団 歌・L. ディアス |

12. 福川靖彦 A la luz del candil (ランプの灯影) F. カナロ楽団
そしてメの13番は
13. 島崎長次郎 La cumparsita (ラ・クンパルシータ) E. フランコ楽団
そして第2部は生演奏。

10月に新作CD「私の想いをあなたに」(池田みさ子とロス・アミーゴス)を発表して益々活躍が続く池田みさ子さんが今日はトリオで登場。バンドネオンに池田達則、バイオリンに専光秀紀というメンバー全員がNTAゆかりの人々。持ちこんだ携帯用のピアノでも随所に充分な“ノリ”が入り、専光秀紀のバイオリンも流麗、そして池田達則のバンドネオンを筆者の膝が触れるくらいの近さで聴けると言う“これこそが生演奏”の醍醐味を味わった。

曲目を紹介する。

1. Felicia (フェリシア 女性の名前)
2. El Entrerriano (エントレリオの人)
3. Organito de la tarde (黄昏のオルガニート)
4. Tema otoñal (秋のテーマ)
5. Romance de barrio (下町のロマンス)
6. Fuegos artificiales (花火)
7. Noche de los dos (二人だけの夜) オールドファンにはたまらない池田光夫作品
8. Quejas de bandoneón (バンドネオンの嘆き)

勿論アンコールありで La cumparsita (ラ・クンパルシータ)

最後に恒例の福引き大会は各人が受け取ったプログラム冊子に付けられた番号によるもの。生演奏の緊張感をほぐして和気藹藹の中に第100回コンサートが終了した。2016年は La cumparsita が誕生して100年目だという。一足先に100の付く記念大会となった。

引き続き場所を石川町駅近くの居酒屋に移しての懇親会には池田みさ子さんを含む34名の出席があった。本会場・二次会場ともに吉澤義郎さんに沢山の写真を撮って頂いた。



オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ

第54回リサイタル

笠井 正史

今や本邦唯一の学生タンゴバンドとして活躍しているオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダのリサイタルが2015年12月26日「なかのZERO小ホール」で催された。今回は第54回で、いつも乍ら会場は現役の大学生、タンゴ・ワセダのOB、プロの演奏家に並んでNTA会員も多数応援に駆け付け満席という盛況であった。とかく高老年中心のタンゴ・コンサートもこの日ばかりは平均年齢がかなり若くなっていた印象がある。

演奏に先立ち司会のNTA飯塚久夫会長が開会の挨拶を述べた後、リサイタルの第1部の演奏が始まった。

第1部は先ず、フリオ・デ・カロ作曲の「エル・アランケ（始動）」で始まり、エンリケ・サボリードの「フェリシア」、パスクアル・マモーネの「ネグロイデ」、オラシオ・サルガンの「ア・フェゴ・レント（とろ火で）」、エクトル・スタンポーニの「フェステハンド」と続き、第1部の最後はロシータ・メロが14歳の時に作曲したと伝えられているバルス曲「デスデ・エル・アルマ（心の底から）」で休憩に入った。タンゴ・ワセダは今年是新入会員15名を迎え、大所帯となった関係で演奏曲目に依ってピアニストやコントラバス奏者が交代するという「いつもの風景」が演出された。

第2部はコンフントによるプログラムであったが、幕開き最初はコントラバスとピアノの二重奏でレオポルド・フェデリコ楽団のコントラバヒスタであったオラシオ・カバルコス作曲の「デ・タル・パーロ（邦題“蛙の子は蛙”）」が披露されたが、目下の処他所ではおよそ手掛けられていないこの難曲を3年生の手塚紗也佳がコントラバスソロで見事に演奏したのは大変な驚きであった。間違いなく本日の白眉ともいふべき1曲ではなかったかと思われる。タンゴ・ワセダは従来優秀な女性コントラバヒスタを輩出しているが、ここまで育ってきているのは今後の楽しみでもある。

コントラバスとピアノの二重奏に次いで、アストル・ピアソラ作曲の「ナイトクラブ1960」を3年生の大塚聡太のギターと1年生の永妻愛里のフルートという二重奏で聞かせた。続いての3曲目もアストル・ピアソラの「ロマンセ・デル・ディアプロ（悪魔のロマンス）」を2年生ながら今やバンドネオン陣を率いる寺内美紀の四重奏で優雅に演奏した。4曲目はルイス・アントニオ・ブリゲンティの「エンスエニョス」を五重奏で、5曲目は何度も来日しているお馴染みのホセ・コランジェロが作曲した「ドウエンデ・イ・ミステリオ（妖怪と神秘）」、6曲目は再びアストル・ピアソラの「ラ・ムエルテ・デル・アンヘル（天使の死）」を四重奏で演奏した。アストル・ピアソラ作品が多く取り上げられると

ころは矢張り若手演奏家ならではの展開かと感じた。

第3部は再びオーケストラの演奏に戻って、先ずフアン・カオの「ムーチョ・ムーチョ」をダリエンススタイルで、続いてエドゥアルド・アローラスの「コム・イル・フォー（お上品に）」をディ・サルリスタイルで披露した後、今度はアストル・ピアソラの曲にオラシオ・フェレルの詩がついた名曲「チキリン・デ・バチン」をタンゴ・ワセダ唯一のボーカルである坂本未来の歌唱で演じたのは流石であった。タンゴ・ワセダでは2014年の第53回リサイタルでもバイオリンの具利珍が「ジョ・ソイ・マリア」を歌っていたのを思い出す。近年このオーケストラが演奏のみではなく、たとえ1曲でも2曲でもボーカルを披露してくれるようになったのは歌のタンゴも手掛けられる訳で大変心強い次第である。第3部4曲目はオスバルド・ベリンジェリ作曲の「ア・ミス・ビエホス（我が両親に）」を、5曲目はアルフレド・ゴビの「エル・アンドリエーゴ（放浪者）」をタンゴ・ワセダが従来得意として演奏してきたオスバルド・プグリエーセのスタイルで展開した。第3部の最後は再びホセ・コランジェロの書いた「フォルティン・セロ（ゼロ砦）」を小松亮太編曲のミロンガで演奏した処で、一旦幕が降りたが、そこはタンゴ・ワセダ歳末の年次コンサートでこのまま終わる訳もなく、オートラ！の掛け声に応じてアンコール曲を演奏することとなったが、その前に幹事長でピアニストの神戸頌子（ごうど・しょうこ）がオーケストラを代表して謝辞を述べた後、当然のこと乍ら「ラ・クンパルシータ」の演奏に入った。その中で司会の飯塚久夫氏がメンバーの紹介を行ったが今年は人数も増え、おまけにワセダといっても「インカレ部員」と称する他大学に学籍を置く4名も参加しているため、紹介も一通りではなく、「ラ・クンパルシータ」も長く引っ張って演奏されたのは印象的であった。

タンゴ・ワセダはプロではない学生のタンゴバンドではあるが、毎年入会と卒業を繰り返す宿命は避けられない処である。然もワセダの場合演奏者は通常3年生の時の年次コンサートで早くもOB／OGとなって仕舞い、4年生は舞台に上がらないことが不文律化？しているようで残念である。今回はバンドネオンの大三輪柚李が特別出演の形で登場したが、今後も4年生になると就活等で忙しいかも知れないが、年1回の年次リサイタルには是非とも登場し、ここで有終の美を飾って欲しいと願っている。



コンサート評

セステート・メリディオナル

(2016年1月22日@相模女子大学グリーンホール)

齋藤 富士郎(町田市)

2016年1月22日、相模女子大学グリーンホール（旧グリーンホール相模大野）において、今回が47回目となる民音タンゴ・シリーズで来日したセステート・メリディオナルの公演を聴いた。セステート・メリディオナルのリーダーであるピアニストのパブロ・エステイガリビア（Pablo Estigarribia）（何とも発音し難いし、憶え難い）は2010年にビクトル・ラバジェン（Victor Lavallén）五重奏団のピアニストとして来日している。その時は彼の名前はまだ知られていなかったが、日本のタンゴファンには若手の腕達者なピアニストであるという印象を強く植え付けた。それ以来、彼の名前は広く知られることとなった。彼はこれまでにセステート・メリディオナルとしてのCDとピアノ・ソロCDを出している。

今回の来日メンバーは第2バンドネオンを除いては先のCDと同じで、
ピアノ：パブロ・エステイガリビア

第1バンドネオン：マルコ・アントニオ・フェルナンデス（Marco Antonio Fernández）

第2バンドネオン：サンティアゴ・ポリメニ（Santiago Polimeni）

第1バイオリン：セーサル・ラゴ（César Rago）

第2バイオリン：ラミーロ・ミランダ（Ramiro Miranda）

コントラバス：ニコラス・サカリアス（Nicolás Zacarias）

帯同歌手はエステバン・リエラ（Esteban Riera）

帯同ダンサーはカルラ&ガスパル（Carla & Gaspar）、ラウラ&フリアン（Laura & Julián）、カミラ&エセキエル（Camila & Ezequiel）である。

当日のプログラムを右に示した。第1部は現代の曲や新作曲、第2部は比較的ポピュラーな曲でまとめてある。しかしそれでもおそらく日常的にはほぼタンゴとは無縁であろう大部分の聴衆にとっては、かなり難しい内容ではなかったかと思う。アンコールは定番のLa cumparsitaであった。

来日してから2回目の公演と

プログラム	
第1部	第2部
1 Saludos	1 Danzarín (piano solo)
2 Meridional	Desde el alma (piano solo)
3 Condenado	2 Gallo ciego
4 Marrón y Azul	3 Melodía oriental
5 Victorioso	4 Responso
6 Chapado a la Antigua	5 Mala junta
7 Por una cabeza	6 Derecho viejo
8 A Evaristo Carriego	7 Quejas de bandoneón
9 Sensiblero	8 Primavera en Tokio
10 El choclo	9 Gricel
	10 Verano porteño
	11 Adiós nonino

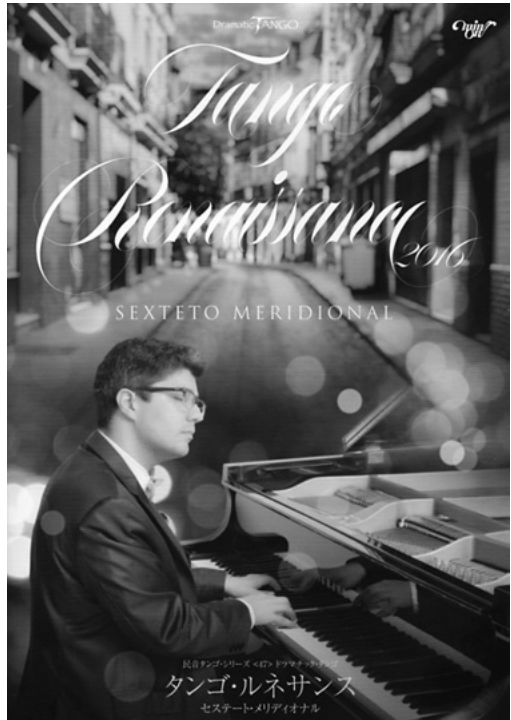
いうことで出来栄えが懸念されたが、それは全く杞憂に終わった。いずれも大変力のこもった名演揃いであった。特にバンドネオン陣がしっかりしており、その大きな音に感服した。最近では日本人のバンドネオン奏者も指捌きでは本場に劣らない人もいるが、音の大きさだけは本場に及ばないと感じることが多い。体力の差であろうか。バイオリン陣も中々の腕前と思ったが、バイオリンに関しては日本でも吉田篤のようなビルトゥオーソが出て来たので、それほど本場との違いを感じることはないようだ。コントラバスのサカリアスもパワフルな中々日本では聴けない音を出していた。

さて、問題はピアノのエスティガビリアである。期待にたがわず鍵盤上を所狭しとばかりに飛び回るそのテクニクには驚かされるばかりであったが、果たしてそれだけで良いのかという疑問を感じないわけには行かなかった。時によっては他のメンバーとの間に乖離を感じることもあった。我々はタンゴという音楽を聴きに来ているのであって、ピアノの名人芸だけを期待しているのではない。

かつて、高山正彦氏がフランシスコ・カナロ楽団のピアニストであったオスカル・サビノに「ピアニストで一番と言えるのは誰か?」(*)と問うた時に、サビノの答えは「ピアニストと言うだけなら、オラシオ・サルガン、タンゴのピアニストと言うならカルロス・ディ・サルリ」であった。これは蓋し名言である。そのサルガンでさえも、メンバーを手持無沙汰にして、ひたすら自分だけが弾きまくるということは無かったはずである。エスティガビリアがタンゴ楽団を率いるピアニストとして大成するためには「爪を隠した能ある鷹」になりきれんかどうかが鍵であろう。

歌手のエステバン・リエラについては今回聴いた限りではあまり感心できなかった。下手であるわけではないが、大きな声を張り上げて歌いまくるだけで表現力というものを感じられなかった。

ダンスは相変わらずアクロバットまがいの振り付けばかりで、こういうのも見飽きてきた。もっとも民音公演と言うことで、日常的にはタンゴに無縁と思われる大部分の人たちに見てもらうためにはこういう振り付けもやむを得ないかもしれない。しかし、タンゴ演奏会はサーカスではないのだから、もっとタンゴ音楽にマッチしたダンスにならないものだろうかと思うことが多い。こうなったのも「タンゴ・ダンス世界選手権」の弊害的一面



(*) 高山氏によると、相手によってはこういう質問をすると「俺をどう思っているのだ」と怒り出すこともあるから注意が必要であるという。勿論、サビノは怒ったりしなかった。

かもしれない。

苦言ばかり呈してしまったが、セステート・メリディオナルがトップクラスのタンゴ楽団であることには異論がない。今回の来日を前に、彼らはメンバーを拡大したオルケスタ編成でのCDも製作しているが、むしろセステートのままでよいから、更に磨き上げ、押しも押されもしない名流楽団になってほしいと思う。



Pablo Estigarribia
Piano



Marco Antonio Fernández
Bn.(Primer)



Santiago Polimeni
Bn. (Segundo)



César Rago
Vn. (Primer)



Ramiro Miranda
Vn. (Segundo)



Nicolás Zacarias
Cb.

東京リンコン納涼大会

日時：7月12日(火) 14:00～16:30

会場：お茶の水「山の上ホテル」

出演：青木菜穂子 (Pf) トリオ

鈴木崇朗 (Bn)

鈴木慶子 (Vn)

歌：ロベルト杉浦



東京・春・音楽祭

— 東京のオペラの森2016 —

— アルゼンチン・タンゴの夕べ

～ 哀愁漂うタンゴの名曲を集めて

笠井 正史

一昨年、昨年に引き続き今年も3月22日に東京・春・音楽祭の一環として「アルゼンチン・タンゴの夕べ」が東京上野の東京文化会館で開催された。今年もオーケストラ・アウロラが出演したが、テーマは「哀愁漂うタンゴの名曲を集めて」と題して、普段のアウロラとは若干趣きを変えて、古典タンゴや現代タンゴの中でも一般によく知られている名曲を集めたプログラムが展開された。

演奏はいつも通り、会田桃子 (Vn)、青木菜穂子 (Pf) の二人マエストラと吉田篤 (Vn)、北村聡 (Bn)、鈴木崇朗 (Bn)、東谷健司 (Cb) の六重奏団で、これにセバスチャンとラウラの踊りも花を添えた。

「パリのカナロ」に始まり、エドガルド・ドナートの「エル・ウラカン (台風)」、カルロス・ガルデルの「想いのとどく日」など、フリオ・デ・カロの「マラ・フンタ (悪い仲間)」まで8曲演奏された処で第1部を終え、休憩の後、第2部に入り、ここではアストル・ピアソラやフリアン・プラサの曲が披露される中、アウロラを主宰する青木菜穂子と会田桃子の新作も夫々1曲ずつしっかり紹介された辺りは矢張りアウロラならではのであった。編曲は会田桃子と青木菜穂子が主に手掛けていたが、今回は鈴木崇朗も一部の編曲を手掛けていた。

第2部の最後の曲はピアソラの「アディオス・ノニーノ」であったが、当然のこと乍らオートラ！に代えて「ラ・クンパルシータ」で終演となったが、今回のプログラムではこのアンコール曲が何故か第2部最後の演奏曲として印刷されてしまっていたのはお笑いであった。おまけに会田桃子の自作曲の題名が印刷に間に合わず「桃子の新テーマ」となっていたのもご愛敬のようであった。会田自身もトークの中で、この催しそのものが昨年今年もクラシック中心で、タンゴはアウロラだけであると言っていたことを考えると、主催者側にはタンゴ通はいなかったのかも知れない。

そういわれてみると、聴衆はNTAの会員とタンゴ・ワセダのメンバーが数名いる以外は、上野というか、会場の東京文化会館のせい、クラシック音楽の方の人が多かったような気もする。民音のコンサートとはまた違った雰囲気であった。その中でオーケストラ・アウロラが好評を博していたのは心強い次第であった。ラティーナの話では当日会場でのCD売り上げも上々であったとか。とかく、「アウロラは自作曲ばかり演る」という風評もあるが、今回の演奏を聴いてみると、古典から現代まで何でもござれで、アウロラ流に料理している辺りは流石であった。毛嫌いせずにもっと聴いてみるのが好きそうである。

会員アンケート

私の好きな Chiqué 3曲選

第5回(最終回)発表

鈴木茂次

以前この3曲選の企画を聞いたときに、私はプグリエーセかトロイロぐらいしか思い浮かばず参加資格なしと思っていましたが、第1回の稿で小林謙一氏が「60種近い手持ち音源から選曲」と書かれていたので、驚いてその資料を頂きました。そのリストを参考に未整理の手持ちCDからほぼ同数の音源を探し出しまして改めて聴いたのですが、結局始めに結論在りきみみたいな結果になりました。

1. Osvaldo Pugliese y su Orq. Odeon 1953

私の場合はそれこそ「チケ」のみならず“名曲名演ベストテン”でもあればその第1位がこれになると思っています。プグリエーセの演奏としては“剛”より“やや軟”に属すると思いますが、その緩急や、その特徴である少し粘っこい高音のソロに続いてうねるような合奏など、その演奏は魅了してやみません。プグリエーセは少しスタイルが変わったと云われる1960年代のほうが私は好みなのですが、これはこれで一つの到達点ではないかと思います。

2. Aníbal Troilo y su Orq. TK 1952

Victor期1944盤はピアソラがアレンジをしていた時期と言われていますが、それと同じアレンジでやはり躍動感に溢れた演奏です。また流麗なメロディーに変わる第3部ですがこちらの演奏の方が、少しテンポが遅くなっている分だけ重厚さが増していて、私の好みに合っていると思いました。

3. Ernesto Baffa y su Gran Orq. P 1996

トロイロの演奏スタイルのテンポを遅くした感じですが、後半にバイオリン（演奏者？）とバンドネオンのソロをたっぷり聞かせる構成になっています。バッファはトロイロのスタイルを継承していて当然ですが、自身が得意のレパートリーにしていると思われる。彼の参加しているタンゴ・オール・スターといえる“Selección Nacional De Tango”（曲ごとリーダーを変えて演奏）では、2006盤、2014盤共にこの曲を取り上げています。

大澤 寛

この曲を初めて聴いたのは高校時代、友人の家だったと思います。その時の印象は薄いというか、種々雑多な（タンゴだけでなく）レコードを聴かされた中のひとつでした。次に聴いたのは25歳くらいのカラカス駐在員時代（1963-65）でした。Taberna de arrabalというラジオの番組があって、そこで取り上げられたのがプグリエーセでした。鮮明に記憶しています。LPを買いました。（下記 1.）

そのLPの同じ面に「Un baile a beneficio」や「Puente Alsina」（唄はどちらもJorge Vidal）が入っていて、こうした唄ものの方をよく聴いていました。

多くの楽団がこの曲を取り上げているのを放送で聴きましたが、私には執着心が欠けていて（つまり怠け者です）、楽団名をメモするといった作業をしませんでした。手持ちのトロイロのLPには「Un placer」や「De pura cepa」などがあって、こちらの方に気を取られていました。（下記 2.）

他に記憶に残っている演奏としてはオスマル・マデルナ（CD FMTANGO）とホアン・カルロス・カビエーゴですが、マデルナのものは現在Todotango で聴けます。カビエーゴ CD はCuarteto de oro というコンフント演奏でBn 1, Pf 1 そしてVn 2 という構成です。（下記 3.）

1. (LP) PARLOPHONE=DECIBEL LPD-4005 “Historiando a Osvaldo Pugliese”
2. (LP) RCA CAMDEN CAL3126 “Pichuco sin palabras”
3. (CD) ONO MUSIC ARGENTINA 2003年4月 “Tangos de autor”

飯塚久夫

1. オスバルド・プグリエーセ (ODEÓN 1953)
2. リカルド・ルイス・ブリニョーロ (BRUNSWICK 1929)
3. フランシスコ・ロムート (DN ODEÓN 1927)

「チケ」の録音は本場の楽団だけでも50種余ある。その中でベスト3を選ぶというのはとりわけこの曲は難しい。1920年に初演された曲にしては、メロディも構成も現代に通用する要素をもって良く出来ており、いずれの演奏もそれを上手く捉えている。今日でも最も良く演奏される曲の一つであり、特に世界的なダンス・ブームの中で必須の曲ともなっている所以であろう。

私が選ぶベスト3は、何と言ってもプグリエーセ、3回の録音のうち85年（コロソ劇場）、89年（カレー劇場〈アムステルダム〉）のライブも素晴らしいが、ここでは53年の定番とした。次は作者ブリニョーロ自身の29年ブルンスウィック録音、そしてロムートの27年オデオン録音である。両者共に後半のバンドネオンとそれに続くビオリンのソロが感動を盛り上げる。

会員アンケート「CHIQUE」3曲選集計

2014 春号				
岩垂 司	札幌市	Edgardo Donato	RCA Víctor	1936
		Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		Juan D'Arienzo	RCA Víctor	1942
齋藤富士郎	町田市	Pedro Maffia	Columbia Japón	1930
		Ricardo Luis Brignolo	A.M.P.	1929
		Ignacio Corsini	EMI	1928
加藤敏司	町田市	Oswaldo Pugliese	F M東京	1979
		Francini-Pontier	来日演奏会ステージ	1973
		Ricardo Luis Brignolo	Brunswick	1929
山根 洋	横浜市	Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		Anibal Troilo	TK	1952
		Julio Pane (Bn. solo)	EPSA	2006
小林謙一	横浜市	Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		Francisco Canaro	Odeón	1929
		Pedro Maffia	Columbia Japón	1930
盛 教	北本市	Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		Anibal Troilo	TK	1952
		Ástor Piazzolla	TK	1950
清水 裕	杉並区	Fulvio Salamanca	Odeón	1957
		Francini-Pontier	RCA Víctor	1972
		Raúl Jaurena	SONDOR	2008
森 正樹	港区	Fulvio Salamanca	Odeón	1957
		Oswaldo Pugliese	Odeón	1953他
2014 秋号				
笠井正史	武蔵野市	Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		Ignacio Corsini	Odeón	1928
		Francisco Canaro	Odeón	1929
杉山滋一	世田谷区	Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		Anibal Troilo	TK	1952
		Estrellas de Buenos Aires	Odeón	1952
鈴木一哉	西東京市	Trío Ciriaco Ortiz	Víctor	1939
		Estrellas de Buenos Aires	Odeón	1960
		Oswaldo Tarantino	Melopea	1991
原田 登	松本市	Carlos Figari	Redonder	
		Donato Racciatti	Venezuela	
		Francisco Canaro	Odeón	1929
山本幸洋	府中市	Anibal Troilo	TK	1952
		Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		Orquesta del Tango de BsAs	RCA Víctor	1983
2015 春号				
池永博威	練馬区	Francisco Canaro	Odeón	1929
		Edgardo Donato	RCA Víctor	1936
		Juan Carlos Caviello	Ono Music	1969
海江田禎二	市原市	Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
佐藤 進	上尾市	Francisco Canaro	Odeón	1929
		Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		Reynaldo Nichele	Microfon	1965
西川 薫	さいたま市	Fulvio Salamanca	Toshiba	1957
		Reynaldo Nichele	Polydor	1965
		Mederos-Prisuela	Warner	2000

福川靖彦	墨田区	Oswaldo Pugliese	Odeón	
		Juan D'Arienzo	RCA Víctor	
		Francisco Canaro	Odeón	1929
宮本政樹	江戸川区	Trío Ciriaco Ortiz	Víctor	1952
		Francisco Lomuto	Odeón	1927
		Trío Argentino	AE	1929
2015 秋号				
吉澤敦子	横浜市	Oswaldo Requena	Polydor	1978
		Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		José Libertella Quinteto	Víctor	1920
島崎長次郎	さいたま市	Estrellas de Buenos Aires	Toshiba Odeón	1959
		Enrique Mario Francini Sexteto	SME	1970
		Reynaldo Nichele Cuarteto	Microfon	1965
弓田綾子	市川市	Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		Florindo Sassone	Polydor	1973
		Trío Argentino	A.M.P.	1929
松本外司	金沢市	Ricardo Luis Brignolo	A.M.P.	1929
		Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		Reynaldo Nichele Cuarteto	Microfon	1965
泉谷隆男	横浜市	Julio De Caro Sexteto	Brunswick	1930
		Pedro Maffia	Columbia	1930
		Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
吉岡達郎	四日市市	Anibal Troilo	RCA Víctor	1944
		Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		Fulvio Salamanca	Toshiba	1957
佐藤光男	横浜市	Ricardo Luis Brignolo	Brunswick	1929
		Ciriaco Ortiz	Víctor	1952
		Pedro Maffia	Columbia	1930
宇都宮知子	世田谷区	Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
町田静子	杉並区	Oswaldo Pugliese	EMI (Teatro Colón)	1985
		Pedro Maffia	Columbia	1930
		Reynaldo Nichele	Microfon	1965
水野 中	ふじみ野市	Julio De Caro	Brunswick	1930
		Fulvio Salamanca	Toshiba	1957
		Reynaldo Nichele Cuarteto	Microfon	1965
脇田富水彦	江戸川区	Ricardo Luis Brignolo	Brunswick	1929
		Néstor Maroni Vanguatrío		
		Trío Hugo Díaz		
石濱 洋	東村山市	Fulvio Salamanca	Angel	1957
		Ricardo Luis Brignolo	YouTube	
		Ignacio Corsini	YouTube	1928
藤木立夫	横浜市	Carlos García	Odeón (日本公演)	1993
		Enrique Mario Francini Sexteto	Víctor	1970
中村尚文	江戸川区	Oswaldo Pugliese	Odeón	1953
		Francisco Lomuto	Odeón	1927
		Ignacio Corsini	Odeón	1928
井上 潤	姫路市	Francisco Lomuto	Odeón	1927
		Edgardo Donato	RCA Víctor	1936
		Juan D'Arienzo	RCA Víctor	1942
福田 陽	新宿区	<コメントのみ>		



海外勤務のため長らくタンゴと無縁の国で生活し、日本に戻ってからそのブランクを埋めるため、極力各所のパーニャに出掛けてタンゴを聴くように努めているが、その多くはレココンで、歌手やコンファントの生演奏を聴く機会もあるが、主力はコメンテーターつきのタンゴをSP、LP、もしくはCDで聴く形となっている。

パーニャに出掛けるようになった当初、今時「レココン」とは随分懐かしい響きの言葉が生きているものだと感心していたが、それもそのはず参加者の大勢は高年齢で80代はベテラン、70代は当たり前前の年齢、60代以下は若手？という構成であるから納得が行く。「レココン」は勿論、レコードコンサートを省略して言ったものだが、そもそも「レコード屋にレコードを買いに行く」のは一時代前の年齢層の行動パターンで、今は単に「CDを買いに行く」と言うのが普通の日本語なのである。

いつぞやタンゴ・ワセダの人にEPを1枚見せた処、「それ何ですか？」と訊かれた。レコードだということは分かったが随分小さな盤だと驚いたらしい。今やカセットテープを知らない世代も出てきているようであるから、レコードはその一時代前の代物ということになる。

さてそこで、レココンの話に戻るが、果たしていつまでも「タンゴはレコードで聴くもの」にしてしまってもよいものか、ということについて考えてみたいと思う。遡れば今の80代、70代のタンゴ愛好家が高山正彦氏や高橋忠雄氏の「解説」を聴きながらタンゴの名曲に耳を傾けた当時は、一般の音源というか「音の出場所」は中波のラジオであった。余程の人ではない限りそうそうタンゴのレコードを何枚も持っている筈もなく、ひたすらラジオでタンゴの番組のある時間を待ったものであった。

その後、タンゴのレコードが市販され手が届くようになってからは、専らレコードコンサートでタンゴを楽しむようになってきたことを覚えている。つまりタンゴ愛好家が集まる所にはタンゴのレコードが必然的に出現した訳で、それも東芝や日本ビクターから発売される国内盤とともに、コレクターが仕入れてくるアルゼンチンやウルグアイからの輸入盤も聴くチャンスが増えてきたのであった。愛好家の所蔵枚数が増えるにつれ、聴く方の好みも専門化というよりこだわりが進み、同じ曲でも録音年代やら演奏メンバーやらによって細分化されて行き、ここにこそ「コメンテーターつきレココン」の存在意義が確立されたような気がする。

そうしたレココン愛好家が現在なお各所のパーニャに集まってタンゴを聴いている訳で

あるが、当然その年齢層は高年齢化しており、CD乃至ネット時代の若い人達には聊か立ち入り難い雰囲気が出来上がっているようである。折角「これこれの会があり、SPで古典タンゴが聴ける」と誘っても自分の親どころか祖父祖母のような年齢層の人達と交わる気持ちはさらさら沸いてこないのは無理もない。では若い人達は古典の名曲名演奏に関心がないのかと言えば、そのようなことは決してなく、かなりの人達が創意工夫で昔の曲目に取り組んでいる。つまりは、「古いタンゴも中々好いのだけれど、ああした会に行くのはちょっと場違いだから……」という処であろう。

そこで高年齢層の側に問題を指摘すれば、どうもあまりにもレココンに拘りすぎているのか、ライブ、つまり生演奏にはあまり足を運んでいない傾向があることである。確かに民音のコンサートには高年齢の聴衆を多く見かけるが、ライブハウス等では限られた常連しか見かけない。折角少額?の予算で生演奏が聴けるのに勿体ない話である。

昨今、日本の若手演奏家の技量は相当高く、中にはプエノスアイレスに行っても十分どころか現地の演奏家と互角に勝負できる人材も豊富に育っている。若手演奏家にしてみれば、聴きに来る相手の年齢など全く関係なく大勢集まって熱心に耳を傾け、拍手を送ることで励みとなり、益々熱のこもった好い演奏を心掛けることになる。言ってみれば一種の相乗効果でタンゴの世界を盛り上げて行くことになる。高年齢者が若い人達の演奏を聴きに行ったからといって嫌な顔をされることは毛頭なく、寧ろ、聴きに来てくれたことで喜んで貰えるのである。中には「遠いから」とか「行ったことがないから」とか「場所が分からないから」といった言い訳もあるであろうが、「好い演奏なら是非にも」と出掛けてみるのが先決である。何故か現在の日本では「奏でるは若く、聴くは老いたり」という珍現象が現れている。「老いている」タンゴ愛好家は概ね年金受給者世代であるから、自由時間は十分あるものの、趣味に当てる予算が限られているとか、体調の問題で一人では会場まで足を運ぶのは難しいとかいった問題はあるようであるが、せめて月に一度ぐらいライブに行ってお生演奏を楽しんでもよいのではないかと思っている。

現役学生による演奏が今やオルケスタ・タンゴ・デ・ワセダだけとなっているが、この楽団が時折ライブハウスで演奏している時も、毎年末の定期コンサートにも、若い大学生はもとより、後期高齢者に及ぶ高年齢層のタンゴ愛好家が聴きに来ているのは見事である。この兆候をもっと広げて、常日頃のライブにももっと高年齢世代の人達が出向くようになれば年齢を超越したタンゴの世界が開けてくることになる。日本が第二のタンゴの故郷と自讃するのであれば、こうした心掛けが必要であろう。



会員の広場

●松本外司さんのバンドネオンが目出度くお嫁（婿）入りしました。

Tangolandia第31号が仲人役を果たし、島田由美子さんのお弟子さんのところへ収まりました。なお島田さんはバンドネオンの修理をして貰えるところを探しているとのことでした。

(編集部)

●機関誌などの名前の由来について複数の方々から質問がありました。

1. Tanguendo en Japón は故・大岩名誉会長を囲んでの懇談中に決まったように思われる。

ちなみにtanguendo (他にもmilongueando という言い方もある) という言葉にはタンゴを楽しみながらあちこち歩き回る = タンゴの “はしごをしている” = といった感じがある。

2. Tangolandia はこれも歓談の席で生まれたもので、Francisco Canaro をお好きであった故・大岩名誉会長が Canaro の音楽劇のひとつの題名から採用されたもの。tangolandia の landia はディズニーランドのランドと同じで “タンゴの国” “タンゴの園” のこと。

3. そして Rincón は間違いなく Juan Maglio “Pacho” の名演 “En un rincón del café” からの命名。そして第1回のRincón は1998年5月11日神保町ミロンガのお店半分のスペースを借り切って行われた。CD解説は杉山滋一・高場将美のお二人が担当された。

(以上は杉山滋一さん・松本保さんのご記憶から) (編集部)

●オープンリールに残された資料

神戸の山本雅生さん宅に舳松伸男さんから託されたもの。ボール箱に一杯だそうです。どなたか現役で使えるオープンリール・レコーダーをお持ちの方はお申し出・お引き取り頂けませんか。

(編集部)

●ライナーノート60枚程

昔買ったSPレコードに挿入されていた説明書 (ライナーノート) 60枚程が手元にあります。今となっては書かれている内容も古く、価値があるとも思えませんが、もしそういうものを収集している方が居れば (居るかなあ?) 差し上げようと思います。

(岩垂 司)

● 「Cualquier cosa」 「訳詞コーナー」 参照。

「Cualquier cosa」という曲名の邦訳を一種類に絞れないかとの質問を吉澤義郎さんから頂きました。これは“困難”或いは“不可能”です。cualquierは、元の形（辞書の見出し語としての）は“cualquiera”です。名詞の前に来ると語末の“a”が消えて cualquierとなります。複数形は cualesquieraです。意味は①名詞（人でも物でも事でも）の前に置かれて“どんな～でも（～は人でも物でも事でも）”というのが基本です（「Cualquier cosa」では“お前のしたことは全て・何もかも”）。②次に不定冠詞や otro の後に置かれてやや投げやりな言い方になります（Un día cualquiera volveré aquí＝“いつかここに帰って来ることもあるだろう”）。そしてさらに“どれでも（物）・誰でも（人）”という意味にもなります。

③他にも“平凡な・普通の・取るに足らない”という意味にも使われます（un cualquiera, una cualquiera など）。もうひとつ付け加えれば una cualquiera は“売春婦”です。

以上は白水社刊「現代スペイン語辞典」から一部を引用したのですが、上記①の用法の日常会話で例えば引っ越してきた隣人に対して“（何か判らないことでもあったら）何でも（私に）言って”という意味で“Cualquier cosa”と言うことが多いです。（大澤）

● 質疑応答

Q タンゴ関連人名の読み方について

Tangolandia 2015年秋号の「チケー 3 曲選」（41頁）で福田陽氏が作曲者をブリニョーロ、補作者をフィリップスと表記されています。一般的にはブリグノーロ、フリッツと表記されますが、カタカナ表記の場合どちらでもよいのですか？

（吉澤義郎）

A 吉澤様のご指摘に接して

ご指摘は人名の発音に関することと理解しました。人名の発音については、その民族・家系・事情により成因が区々です。日本の事例にあっても、

(藤) 原	(フジ) 原	齋 (藤)	齋 (トウ)
(菅)	(カン)	(菅)	(スガ)
(良) 子	(ナガ) 子	(良) 子	(ヨシ) 子
藤 (澤)	藤 (サワ)	小 (澤)	小 (ザワ)

のように、同一の漢字でも特定の人名について、呼称が定まっている。アルゼンチンにあっては、主としてヨーロッパからの移民の子孫であり、スペイン人が建国したが、その後の移民増大政策により多数のイタリア人が流入し、国民の人口比率

会員の広場

は概略3対7であるといわれている。そして、音楽家はイタリア系の人が多い。

「チケーの作曲者」については、某高名な方のお話の中で「ブリニョーロ」と発音されていたのを記憶していたので、スペイン語またはイタリア語に由来するものと想像して、両語の参考書を参照したところ、イタリア語の (gn) は邦語の (ニャ) 行の発音に近いことが判明した。そこで、そのお話しのと通りの表記とした。

関連してCopello という舞踏家が高名であるが、スペイン語の読み方ではコページョとする邦人もいる。ご本人から指導を受けたことがある先人のお話しでは、ご本人はコペルロと発音されているとのことである。イタリア語の読みである。

その他の例では、Biagiの読みをビアジとビアヒの両方に接したことがある。

人名の発音は、正確には本人に当て確認することによって確定できるものと考ええる。文献のみでは的確ではないことも考えられる。

もう一つ、フィリップについては、筆者が文献（石川浩司編「タンゴ名曲事典」）からの引用の過程で誤記したものと考えられる。文献以外に資料が無い。

ご指摘を頂きまして感謝します。

（福田 陽）

●吉岡達郎さんが三重県総合文化センターで講演

三重県生涯学習ネットワーク共催事業として県からの要請を受けて「タンゴの魅力に迫る」と名付けた講演が行われます。6月11日（土）10：30～12：00 総合文化センター3階。出演料なしのボランティア講演です。こうした地域に根差した活動に貢献されることに深い敬意を表します。

（編集部）

「ラ・クンパルシータ全集」は9月1日発売予定。価格は4,500円+税です。

3月6日の全国会員の集いでは発売時期の問い合わせが相次ぎました。現在、録音作業に合わせて詳しい解説の冊子の準備も行われている最中です。ご期待ください。



新・訳詩コーナー

大澤 寛

「Cualquier cosa」(何もかも)(どんなことでも)

Letra y música : Herminia Velich + Juan Velich

お前のすることは何もかも
お前の性悪さに腹を立てさせて
真っ当な男を憂鬱*にさせることに
なったんだ
お前がしたことで 俺には判ったぜ
俺に笑いかけたお前の愛には
別の目的があると
思っていたんだ
狂ったお前
残酷な 悪意のある心の
お前の小ずるい一刺しで
俺は幸せを全て失くしたんだ
まさか
しつこく考えてはいないだろうな
俺には何の魅力も無い
窓枠の花**になろうなんて
海と空とを緬い交ぜにした
お前の美しいみどりの瞳は
俺の心を苦しめる
悲しみを残した
戻って来ようなんて決して考えるなよ
お前は出て行ったんだから
お前が俺に残した傷は
許されるものじゃないんだから

*splin= esplin (古語) 憂鬱・厭世的な気分=melancolia

**flor de cerco の cercoは窓枠・囲い・フェンダーなどの意だが、ここでは女が自分の考え方の中に頑固に閉じこもっている=囲いの中の女には男は手を触れることはできない=従って魅力・興味はないということの暗喩らしい(会員のホアン・リオスさんのご教示による)。女の頑固な考えとは多分お金や宝石を求めること=まともな家庭を作れないことであり、それを変えさせるとは出来ないという男は気付かされたというストーリーだろう。

日本タンゴ・アカデミーの行事予定

- ◎東京リンコン 日 時：5月17日（火）
会 場：原宿「クリスティー」
日 時：7月12日（火）
会 場：お茶の水「山の上ホテル」
- ◎関西リンコン 日 時：5月22日（日）
会 場：「サロン・ド・あいり」
- ◎セミナー 日 時：5月8日（日）
会 場：信濃町「東医健保会館」
- ◎ミロンガパーティー 日 時：9月22日（祝・木）
会 場：いきいきプラザ一番町カスケードホール

会 員 動 静

(2016年3月末現在 176名)

入会者

土方孝人（東京都港区）

退会者

足立忠男 河原孝嘉 山崎振吾 田井道夫 福井利恵子 本間正行

次号の原稿締め切り日

Tanguendo en Japón (2016年7月発行)：2016年5月31日

Tangolandia (2016年10月発行)：2016年9月15日

編集後記

熊本大地震の被災地の皆様に心からお見舞申し上げます。

2016年春号をお届けします。執筆頂いた方々、編集に協力頂いた方々に深謝申し上げます。NTAの進むべき方針を飯塚会長が巻頭に述べておられます。ご精読下さい。「会員の広場」がスタートしました。どうか皆さまの懇談・情報交換の場としてご利用願います。「チケー3曲選」を本号で終了します。沢山の方々のご協力を頂き有難うございました。(大澤)

日本タンゴ・アカデミー副機関誌

「Tangolandia」(非売品・禁無断転載) 第32号 2016年4月発行

発 行：日本タンゴ・アカデミー

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤2-32-14-104 (飯塚方)

電話&FAX 03-3324-1989 E-mail iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編 集 部：大澤 寛 (編集長) 〒162-0051

東京都新宿区西早稲田2-1-23-609

TEL 03-3208-2247

E-mail hdomingo@bc4.so-net.ne.jp

副 編 集 長：池永博威・笠井正史・鈴木啓子

編 集 委 員：弓田綾子・宮本政樹・島崎長次郎

表紙デザイン：脇田富水彦

印 刷：株式会社 藤印刷 〒102-0072

東京都千代田区飯田橋2-13-1